



新相川園志

三

ル 4
6317
3





利根川圖志卷三

下總 布川 赤松宗旦 義知 著



新利根川 寛文二壬寅年押付松本行徳今この二村廢して押付村持添ふ松本分行徳分
存の名を中田切等の地を鑿りて新川を十六島不達す開の時鑿
村々印幡沼北畔不於て替地を賜かくて布佐の高臺と布川の
間不堤して川を塞ぎ今此の處をシ水を新川ふ入る寛文六
丙午年不落成す然れども太直不して水竭き易く舟行不便な
りざるを以て同九己酉年塞を去り新利根川の口を塞ぎ別に
羽根野の水門を開き蠶養川の水をせき入れ用水の便とす明
る十庚戌年功畢る後天保十壬亥年二の堰を豊田村同十一辛
亥年より十三癸丑年まで大堤を修成す以前ハ敷七尺許寛保
二年壬戌洪水不壞りる間部若州侯與りて修補す築下總州新
及分流支派之堰延衰二十五里首自下總州相馬郡利根川大堤
付新田腹接常陸州河内郡尾距下總州杵取郡結佐村と原代村の總

三川地

督あり植田左仲命純右根野明三年癸亥四月功成る
村新利根川蠶養川の間ある一帯の丘山の上不在りこれを

置きて布川の豊島家より守りしが後龍崎土岐大學不奪ハれ
一を上の時押戸の原不る搔岡見中務少輔信貞常陸國河内郡
の長臣栗林下總守義長が計ふて土岐不乞ひて布川不還附せ

常總軍記卷十六云行方の合戦ハ兩土岐利をくして歸陣せし
が士岐大學諸臣を集めて申しはるハ中畧この河内郡ハ下總
國相馬の北郡不隣りしと文間原唯一重不して敵地不近し
爰不村川の横須賀の奥山ハ本注私曰今横須賀奥山村と卿を
無く横須賀の奥山あり横須賀の村と卿を
り龍崎不存むありむその頃ハ無し此れハ領地と爲て御弓組と
ハふ足輕居とる所ありとぞ今不御弓新田といふとあれハ何

後年出來り中畧村ありこの所常陸下總の境不て文間原と
り中田切といふ村と新田あり頃横須賀より立木といふハ續に
の頃ハ無之といふ村と新田あり頃横須賀より立木といふハ續に
谷中あり文の間大明神圓明寺は千葉の建立あり文間原ハ
ハ高砂佐沼皆原あり圓明寺は千葉の建立あり文間原ハ
ハ古横須賀の豊島紀伊守が次男不て半之允岩を構へり
分あり伊守頼繼その子主水彼を追落して奥山を出張とすべ
頼言その弟半之允といふ彼を彼を追落して奥山を出張とすべ
一彼處ハ並なき要害あり若これを畧りずハ千葉が勢攻來て
奥山不籠り當地を窺ふ不於てハやくし難義あるべしこの
事如何ありむと評定すいづれも承りて至極せし御事あり何
ともあれ兵を出して一攻して通塞を御覽可然と申しはれハ
然りハとて諸岡角三郎一子あり大野大隅淺野一郎右衛門森
左京中島權亮を大將として三百餘騎不て押懸るりこの所
龍崎より相隔る事一里許あれハ道の難處も無く攻付る

三川北

二

りかぬて隣國の境目あるは油断すべき非ずして常不遠見
の櫓を上にて兵を付けて置き、若異變ありは螺を以て知
りしむべしと號令を施し、故番兵どもこれを見て急不螺
を吹立て告ぐ、うばすハや敵こそよせされとて砦ハ大不騷
動す、砦の主豊島半之丞固より名を得し勇士もて鎧取て投懸
け十文字の鎗押取て馬不打乗り者共續けし北坂不乗出して
戦ひしうバ我々と家人共甲冑を帶して北坂不向ひしりそ
の勢漸五十人ハ足らざりし半之丞眞先かけて嵩より追
落しられバ土岐勢ハ坂下不在り殊不この頃雨下りて赤土交
ある滑坂あるハ働自在ありずして討さる、者多くとつと崩
れ敗北せりあハや城方討勝つべかりし半之丞運や盡き
まりしむ誰射るとも無き鶴羽の矢一飛來て半之丞右の
膝口不すバと立つ痛手ありしれバさしもの半之丞とまり

ずして馬より落ちしりし土岐勢ハこれを見て大不勇を爲
し守返して攻上る城方ハ色を失ひ半之丞を介抱して砦不引
返す固より纒ある小勢と雖半之丞勇敢の者不て戦ひさる故
不こそ勝利ハ得され大将深手を負ひしうバ残る面々度を失
ひ足弱を引連れ半之丞を肩不引掛れて存川砦不引返せりこ
の時存川の豊島紀伊守ハ折悪く千葉が小金の矢葺大膳が雌
伏せざるを攻むべしと紀伊守と成田の成田八郎武田左近等
不告知しされバ彼處不在陣して留守ありし不嫡子主水ハ
所勞不犯され惱固し居られバ勢を集むる不以外の外不勢不て
漸三十人許あり兩手の勢を合ハすると土岐勢ハ掛合ひ
難く殊不兩大將共不かくの如くなりしうバせむ方無く若や
存川をも攻むへきしやと根本平六横田庄九郎白井半大夫等
の家臣下知して手配して待ちしうども土岐も戦疲れしれバ

奥山を乗取り一計ふて勝鬨をあげ砦不引入りこの由龍崎へ
注進して敢て存川をバ攻めざりぬる

文

間明神社 兩社あり西あるを角宮といふ 額蛟蛸神東を奥宮
といふ 正一位文間大 共不立木村不在り丘山の上あり 山の丘
木奥山 大平北方早尾羽根野を連ぬ 即延喜神名式ある相馬郡
西行して新利根川の入口不終る

の蛟蛸神あり惣國風土記下總國相馬郡部云蛟蛸神社圭田
三十九束三畝田所祭罔象女也天平二年庚午六月始奉圭田神

事式祭等始也諸國圭齊録下總國部云五十石文間大明神領
相馬郡布川卿立木村

領五十石 神主 友野因幡 國花萬葉集卷十下總國部云文間明神社
交代す 神主 友野因幡 別當 神宮寺 祓豆 夜宮 神官七人 まよ

焼といふ事あり寅時許神前の篝火不て舊き御座の縮を焼く
奉納 蛟蛸の蛸ハ罔象の義不とれる字あるが後不ハ蟲旁か

す 蛟蛸の蛸ハ罔象の義不とれる字あるが後不ハ蟲旁か

す 蛟蛸の蛸ハ罔象の義不とれる字あるが後不ハ蟲旁か

す 蛟蛸の蛸ハ罔象の義不とれる字あるが後不ハ蟲旁か

す 蛟蛸の蛸ハ罔象の義不とれる字あるが後不ハ蟲旁か

す 蛟蛸の蛸ハ罔象の義不とれる字あるが後不ハ蟲旁か

す 蛟蛸の蛸ハ罔象の義不とれる字あるが後不ハ蟲旁か

布

川 古ハ存川と書きて豊島家不有一千葉家不屬一數軍功あ
り一ガ常總軍記卷十五千葉家濫觴條云滑川龍臺の織田左京

男頼定を退退け銚子より海上に取香取千葉印幡北相馬を取
り安食上下利根を限り八里を攻掠旗下一族最多助崎

馬加大須賀圓城寺東米野井長沼存川横須賀荒海布佐大森飯岡
橋廣岡青木伊能尾金田林長澤印西ハ口を限不旗下家臣夥く

四月上旬 畧總州の千葉介利胤ハ畧村岡河原不著馬一龍崎士
守谷布川 篠田一色小山近藤等の味方を待受け云云

岐家不奥山砦を奪ハれ一不因りて援兵を乞へども果さるる

時常陸國河内郡足高ある岡見中務少輔の長臣栗林下總守義

長の計不因て岡見家不屬一その後小田原北條家不屬一その

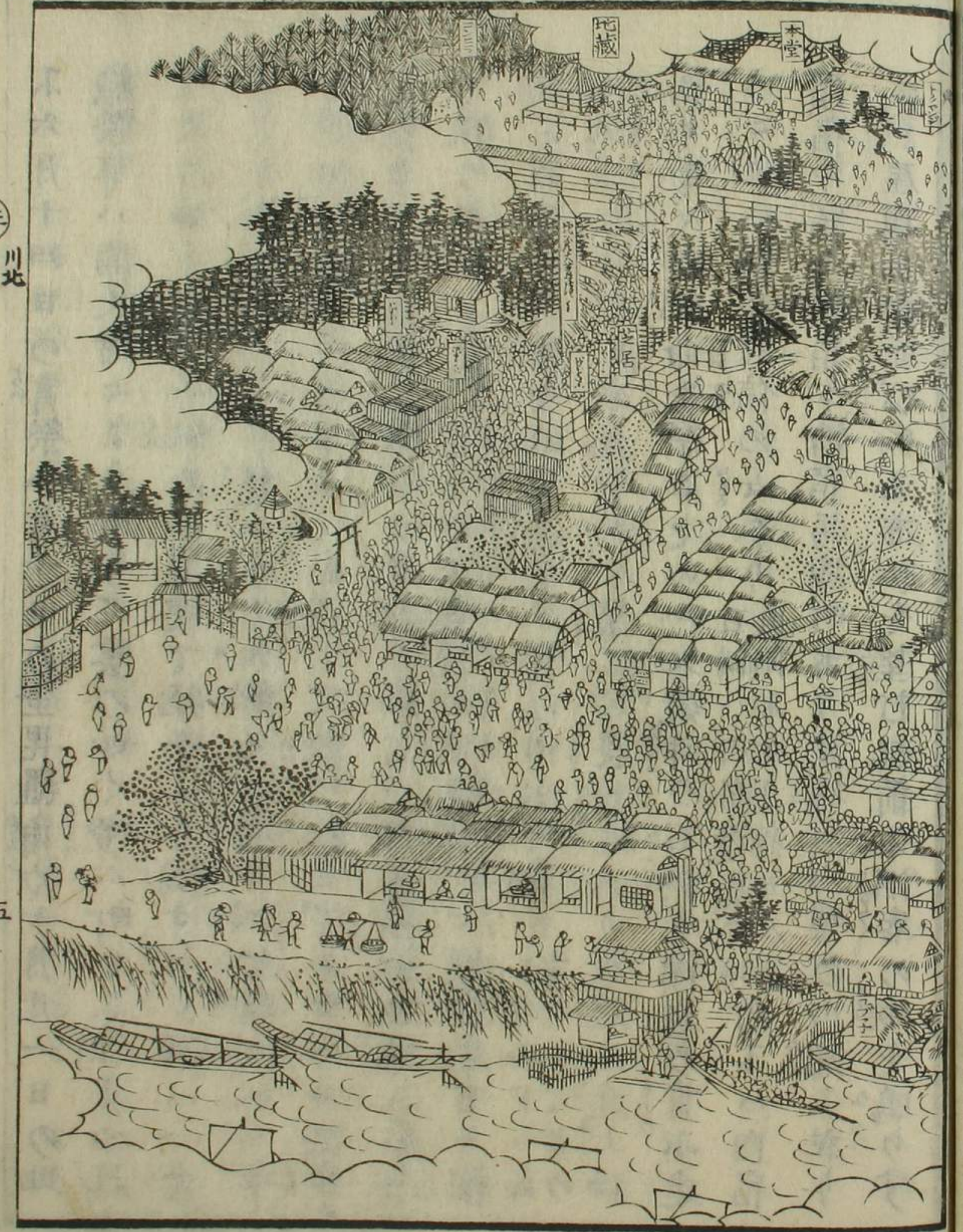
落城の時同く家絶えたり 鎌倉九代後記小田原籠城人
布川ハ一帶の丘山を背不一前ハ利根川不臨て街衢を列ぬ

人烟輻湊して魚米の地と稱する不足れり 舊地ハ山の西北殊

人烟輻湊して魚米の地と稱する不足れり 舊地ハ山の西北殊

人烟輻湊して魚米の地と稱する不足れり 舊地ハ山の西北殊

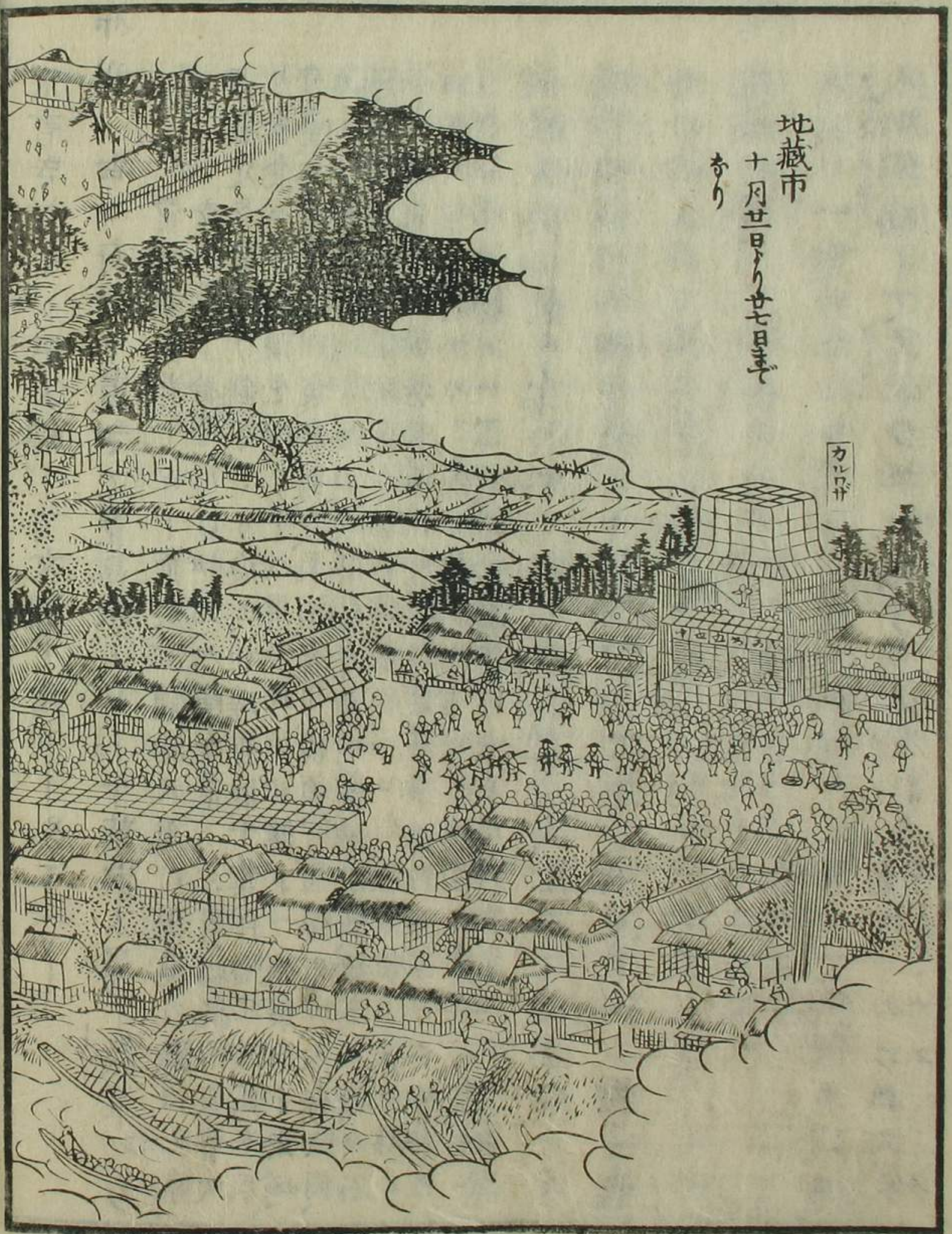
三
川北



五

地藏市
十月廿日より廿七日まで
あり

カレガ



六月十四日の宵祭八月十日の金毘羅角力十月廿一日の地藏祭等ハ詣人村々より來りて雲の如く燈ハ町々照一つれ
て月の如く魚ハ一帆の風を使って鉞子より輸すべく酒ハ一葉
の力を借て江戸より運ぶべし大率その時すべて醉人ありざ
る者無これども昇平の化ふ浴して敢て狂せず小女ハ砂糖齋
ふ飽きてその他を求むる事無し山ハ金毘羅社西端ふ建ち
て城の大手と覺し道を夾て乾陞の狀あり次ハ德滿寺有り樹
間ハ利根の行舟を眺み遙み手賀の沼水を看る場町ハ山下ハ馬
跡あり中ほどハ來見寺あり最も可畏古迹あり東端ハ産土神
あり向々廻馳命を祭るといふ又姥神の石祠を濱宿の首ハ建
つこれハ新井照信の女あり石祠ハ内宿濱宿の境南側ハ在り高五尺許町ハ内宿
濱宿中宿上柳宿下柳宿馬場町あり渡場ハ内宿の川端ハ在り
て魚屋場ハ相並び向ふ布佐を望む風前ハ酒客の喉を鳴りす

有り月下ハ騷人の舌を鼓する有り是を以て舟ハ下りてハ流
小枕すべく岸ハ上りてハ石ハ漱ぐべし而して後の山を望み
てハ豊島と新井の盛を想ひ前の川ハ臨みてハ千葉と岡見の
争を歎ずげハ蝸牛の角石火の光あるべし今昇平の化ふ浴し
てかく暖ふ衣飽くまで食ふハ誰が恩ぞや

江戸の方向ハ言ハ雪の富士

海 珠山德滿寺 眞言宗常陸國信太郡大岩田村法泉寺末あり開
基詳ならず元龜年中祐誠上人中興すといふ本尊地藏菩薩濠洲
作御長七 毎年十月廿一日より廿七日まで開帳して諸人ハ拜
尺三寸 せしむその間詣人羣集し商旅來會すこれを地藏市といふ諸
國圭齋録下總國新義眞言部云二十石 相馬郡布川村 德萬寺
金 毘羅社 地藏堂の西ハ在りその間路の左右ハ乾陞の迹あり
されバこの地城の大手あるべし境内ハ空居心經碑あり又て

この地ふ於て毎年八月十日祭禮相撲ありていと賑へり
べつりといふ人のある本や官相撲
一茶

瑞 龍山來見寺 龍海院と號す開山獨峯和尚 天正十子 諸國圭齊

録下總國曹洞宗部云三十石 相馬郡布川村 來見寺 國花萬葉記卷十下

家寺領 常總軍記卷十六云今布川ハ布川と改む來見寺といふ 總國部云來見寺洞

禪寺あり下妻多寶院の末寺小て曹洞宗あり御朱印三十石あ

り昔ハ頼繼寺といふこれ紀伊守の建立あり天正十八年御入

國の後布川と改む頼繼寺と來見と改むとあり是ハ御入國有

て御巡見の折柄此處へ來りせむひ絹川る類して布川ふて可

然之頼繼ハ我來見の上ハ來見寺とつくべしと上意あり 中畧

又この寺の住職ハ昔遠州ふて能く知りせむひ僧ありし

ハ望を申すべしと仰有りしが堅固の道心人ふて嘗て望ふし

と申上るる故一ハ御賞美ましくて庭前ふ小き松の有りる

を御所望ありその代として梅を祀下り今ハ御城矢來御門

の内ハ梅替松とて大木あり又來見寺ハ松替梅とて本堂の前

ハ在りこの梅ハ御朱印三十石を祀下といふ因て布川の事を

松替里といふ由あり布川ハ御入國以後松平五左衛門近正ハ

下さる 境内阿弥陀經碑背下總州相馬郡布川村瑞龍山來見

府河城主豐島頼繼開創城主風聞下妻多寶院四世 郡

獨峯和尚在小田原最乘日有降魔瑞而屈請和尚以爲開山第一

座開堂日實有神龍雨之瑞故以爲山號取城主諱以充寺號表

轉輪不退德三世日山和尚者參州岡崎人既爲龍海院住侶也其

是故蓋與官有舊知以慶長九年三月十五日賜寺領御朱印其

年御狩之日輿輦臨本院賞寺庭松樹與寺外河水廻流委蛇如敷

白布曰存河布川頼繼來見呼音相近今日來見白布廻流委蛇如敷

松樹矣寺稱來見河呼音相近今日來見白布廻流委蛇如敷

住持僧替庭松樹以御愛梅樹輩松樹移植之於御本城今本院於

尊崇御松替換者即是也當時拜賜文衡山畫幅及御饌點茶供具

等寶戴于本院云とあり

頼繼寺奉寫基知乃事

三川北

七

一 市西の内作屋々 十五貫五百文

一 同所大森の内 二貫八百文

一 府川の内 十貫五百文

一 文間早尾の内 三貫七百文

此夜頼継寺被用基三付至子孫存之知乃

全抄遠可奉付如件

永禄二年七月廿日

拜進頼継寺

衣許役者中

頼継判

按不豊島家の事常總軍記卷十六云豊島紀伊守ハ清和源氏ノ
一 最名家あり 源三位頼政の子孫トヘリ此の時ハ高
七千石ありトウヤ今押付上江下江上曾根下曾根早尾大平
北方羽黒横須賀等の村々有りその頃ハすべて府川領ノ一
紀伊守ガ領地あり

又舊家新井氏あり同書卷十九ノ其の來由を載す云爰ノ常州
新治郡小野崎の新井縫殿介ハ小田天庵の旗下ニ有リ一
藤澤籠城の時籠りて没落セ一ガ固より武勇の者ニテ天庵の
危急を見あからこの儘暫居セむハ勇士の爲ざる所ありと思
ひ又々土浦ノ來り持口を固めむと申一なる故一と大切ニ
る搦手間部臺を固め忠戰を勵ま一落城の時切抜けて歸リ
本注この新井ガ先祖ハ岡見の先祖栗原太郎信勝の七男新
井七郎信厚ガ末あり中畧常州小野崎といハ新治郡の内
ふ一て谷田部ト土浦の間ニテ土浦より然と雖天庵滅亡セウ
ハ遠一谷田部よりハ近キ處あり下畧 然と雖天庵滅亡セウ
れ一ウバ自立もあり難く佐竹多賀谷ノ降ラむと口惜と思ひ
なる爰ノ下總國北相馬の府川の主豊島紀伊守頼継ハ姨チハノ
一 頼継ガ粹主水半之丞トハ正一キ從弟あり姨チハト戀カハヒ一
府川へ落來リなる不他人ありざれば差置キナリ
按不この後客分ト爲リ陣代をも勤め軍功ト有リて終ハ一分

の主と爲りしあるべし今その家存して系圖并ふ古文書數通を存せり下に載す

系譜を按ずるに清和天皇三代武藏掾源滿季男栗原式部後胤

栗原太郎信勝之常元平治之合戦官軍屬甚有軍功勇名依

りてハ信家太郎信春野中瀨二郎信平平井三郎信國坂井四

于坂信秀沼尻五郎信吉栗田住信政山口六郎信厚新井七郎信

井野信吉栗田住信政山口六郎信厚新井七郎信

の後照信の代よりこれを寫す 常陸小野崎城主

信厚以來代々仕小田家也小田讚岐守天庵氏治公十五代

而天正二年二月廿七日爲竹馬郡府川矣奉遷座氏神白山

權現令崇敬也其後通心於小田原八王寺城主北条陸奥守

馬當家守本尊同郡柳戸那觀世音菩薩也天正十年二月廿

二月端嚴美麗絶人容貌眉目如畫見者肅然改容矣天正三年

上下水底更不見之河端脫置行方不知依之數日雖尋河之

氏神則今姚女神官此也 子孫繁榮云依之當家奉崇敬

照治 初治部大輔 後但馬守

永録七甲子年於于同國國府臺房州里見義弘兵發與小田

原戰時照治從途歸陳矣天正年中於于裏伐之西野氏照公

取猪狩時牧場惣掛之役蒙仰也且照公鷄子二獻上之御

祝喜之餘御直書給之矣其外至松田尾張守狩野一菴宗圓

皆川山城守皆川將監佐瀨七右衛門青野大藏牛田作右衛

門増田新七等數多諸書物有之矣天正十八年豐臣秀吉公

小田原發向此寺城之中曲輪守之討手大將加賀筑前守利

并一菴共八王寺城之中曲輪守之討手大將加賀筑前守利

家同利長打向大戦天正十八年三月廿三日終令落城自殺

也 信親 兵衛三郎 氏照公軍用諸荷物商賣奉蒙仰小田原往來之親那一艘十

四十駄之御朱印被下置無患令運送通路也

継信 初信重 治部

天正十八年小田原落城之後、尚令年人住于有川、有川古昔之城主、豊島刑部頼継、天正十八年與小田原公共登山高野山、慶長四年七月、継之一字給之、則號継治、後來子孫継之意、故給継之字矣、文禄三年、江戸蒙將軍家之命、諸國檢断所相迎、至寛永十三年、諸色御用專勤也、于今御黒印數通有之矣、寛永十八年二月十七日卒、葬于來見寺、

以下畧之

今も代々の墓來見寺に存せり、又系譜ふへる白山宮ハ來見寺より西方ある山下に在り、柳戸村觀世音ハ手賀沼の南に在り、姥女神宮ハ布川内宿濱宿の境ある家の側不在り

所藏古文書現存十通 北條氏照書翰 狩野一庵 同

皆川山城守 同 皆川將監 同 牛田作右衛門 同

青野大藏 同 豊島頼継一字書附

天正九年辛巳六月三日船一艘十疋十駄書附

同十五年丁亥九月七日傳馬一疋書附

寛永五年戊辰四月廿六日傳馬一疋書附

以上

布川大明神 來見寺より東方山端不在り、馬場町の上あり、祭神

句々廻馳命、例祭六月十四日、ノ切の假殿、入神輿を出す十五日

屋臺等を出し、甚賑へり、十六日神輿本殿に歸る時、境内に尋撞

の舞あり、先庭上、小船形を造る、これを御船といふ、これに帆柱

を立つるをツク柱といふ、長八舞人、雨蛤の面といふ、これを被り立

附をたき、竹弓を持ち、柱に上り、その上にて種々の状を爲す、觀

る人、戰栗す、この時、船中にて八九歳の男子、數人を、て地舞を

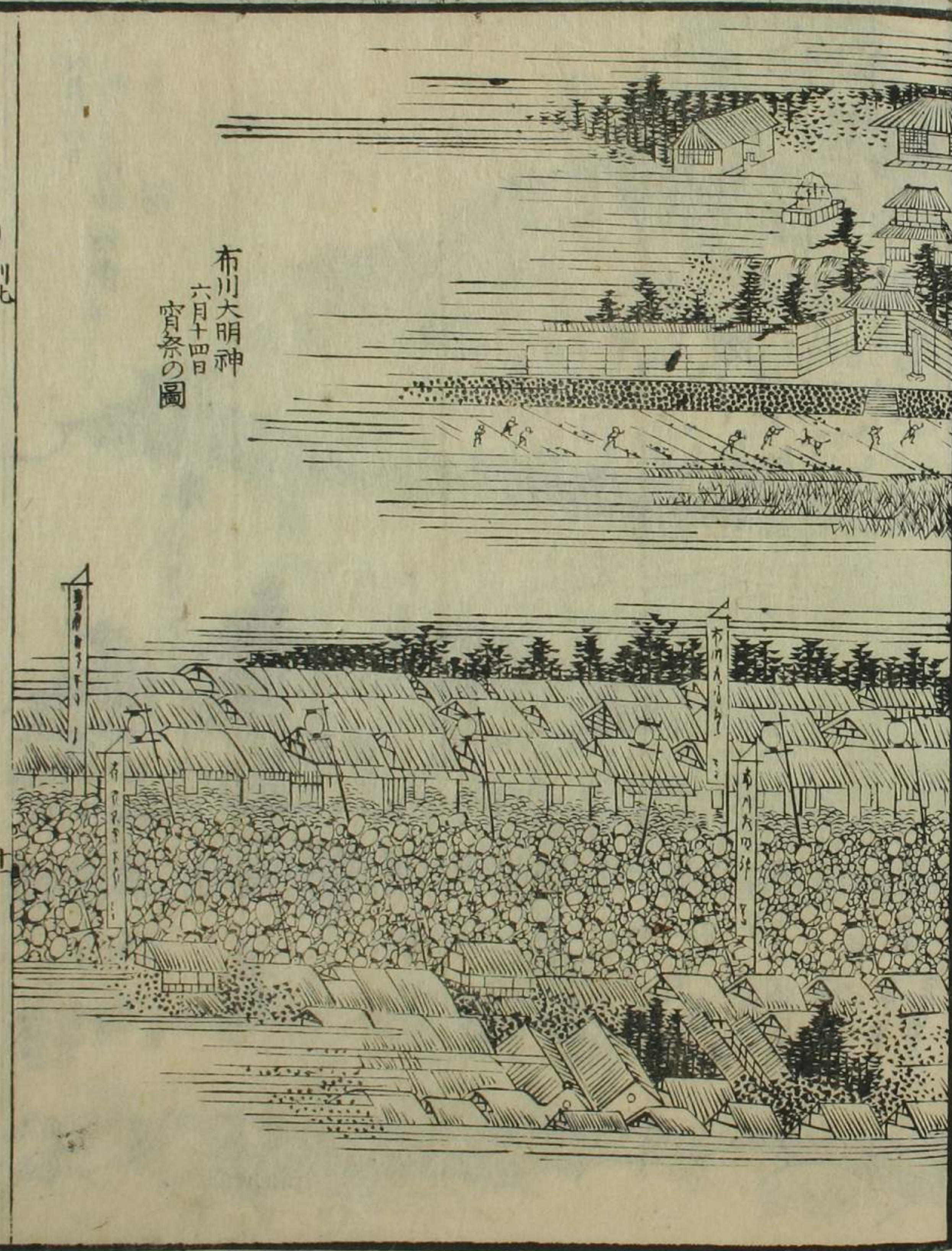
舞ハ、む鶴龜鹿猿龍等の面を被る中、もと蟒蛇が、姫を吞まむ

とするを、山伏の防護る状を爲す、ハ素戔嗚尊の故事を學ぶ、あ

るべし、舞の狀、笛鼓の囃等、至て古風あり

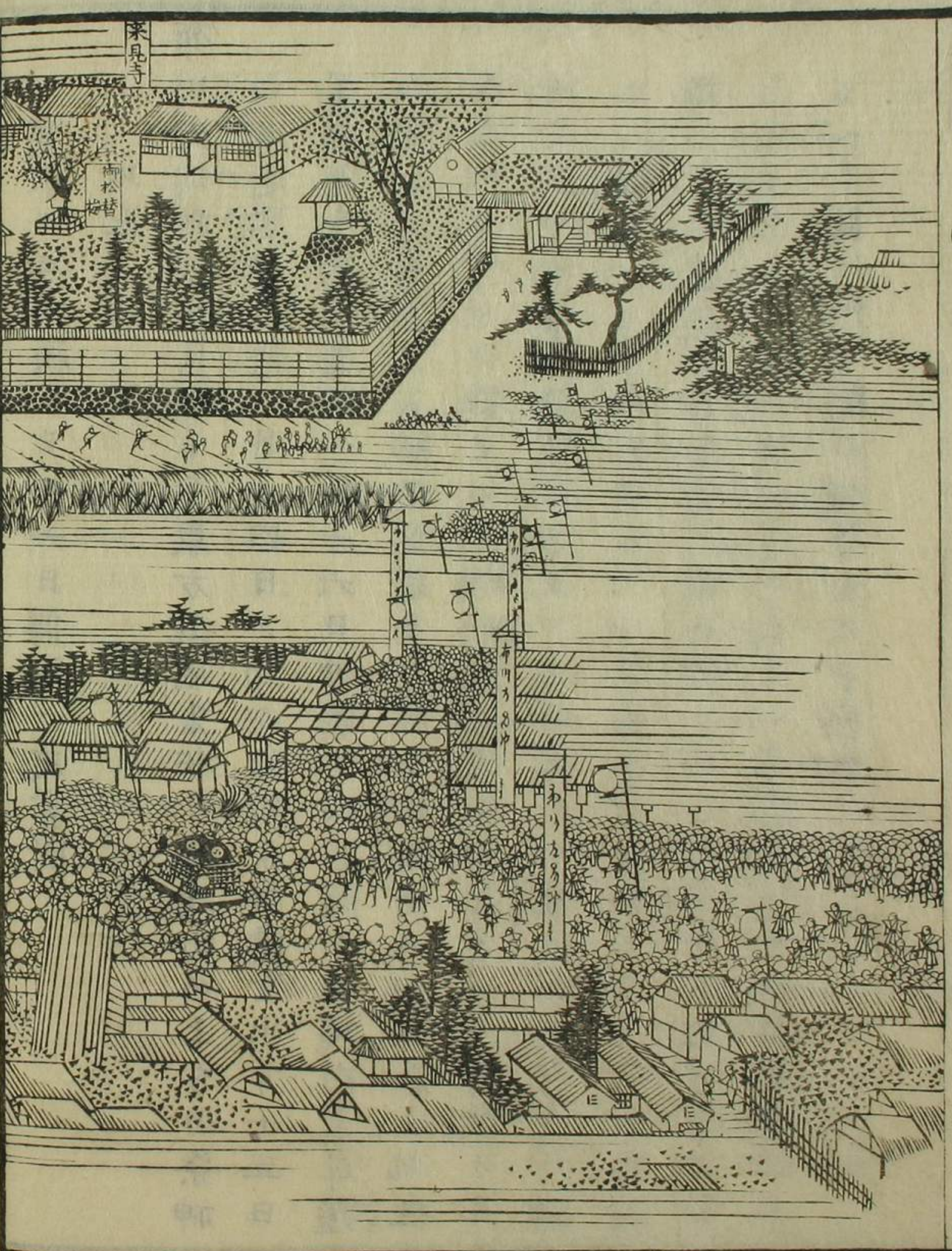
三
川北

布川大明神
六月十四日
宵祭の圖

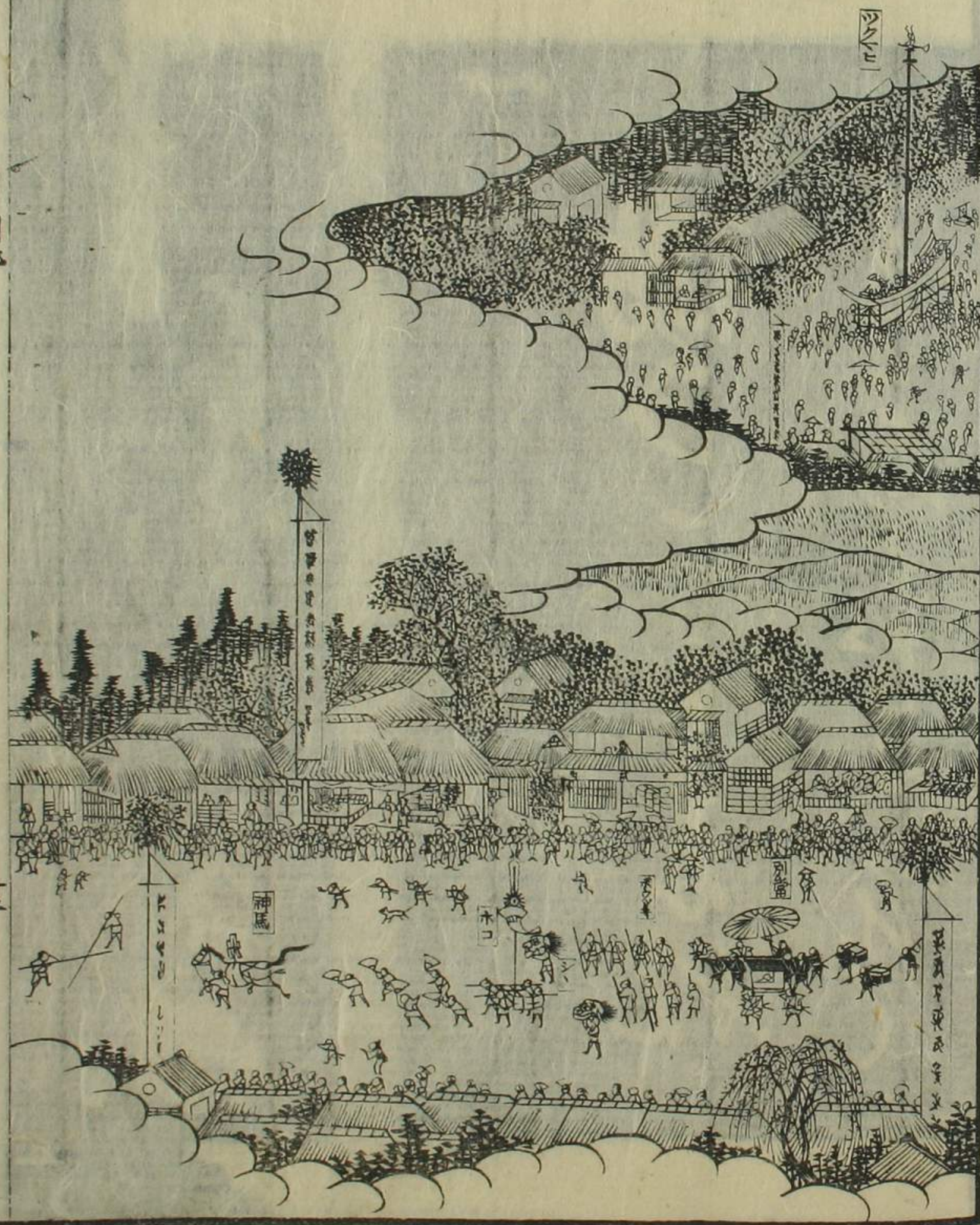


米見寺

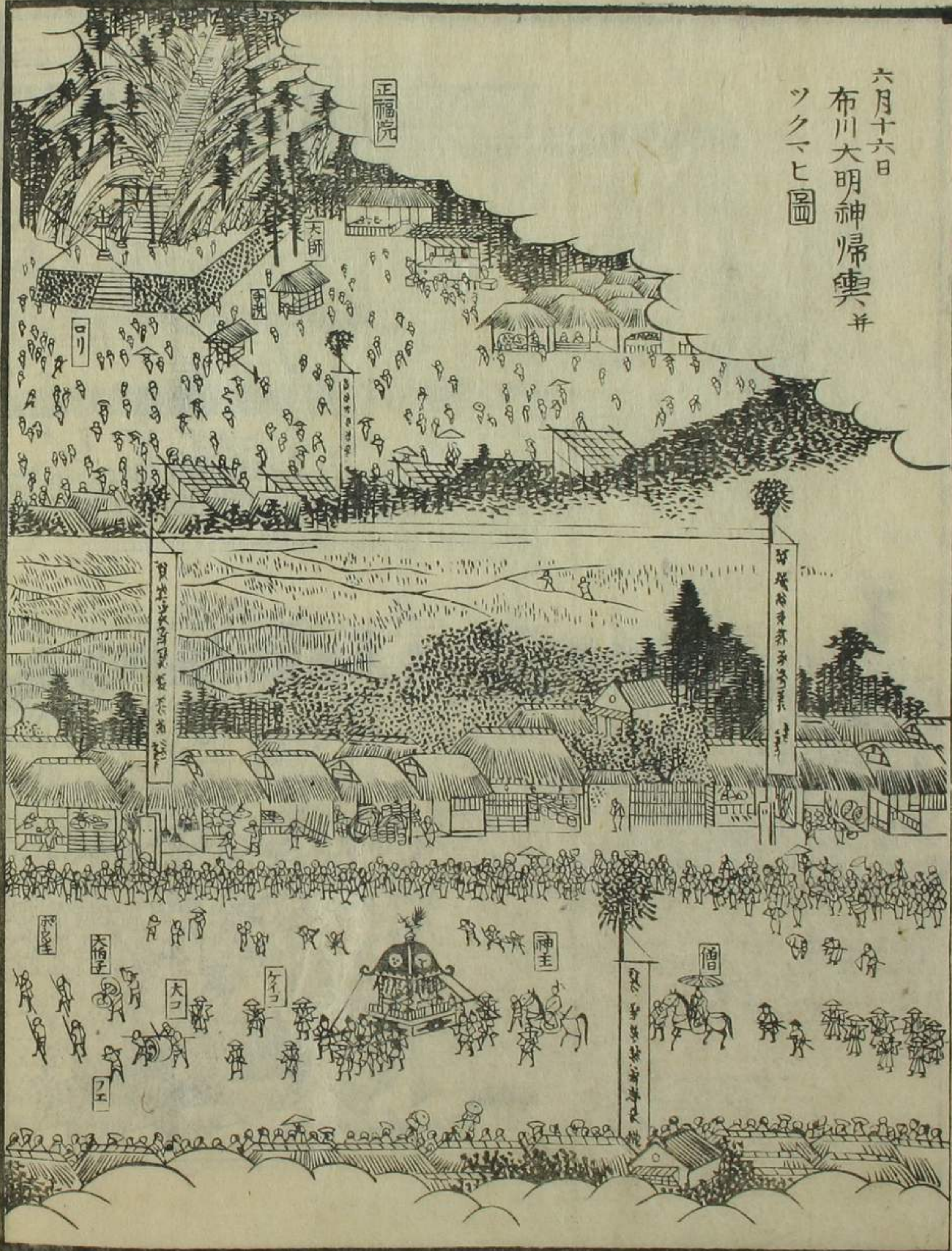
柳松
花替



川北



六月十六日
布川大明神帰奠并
ツクミヒ圖



暮年修志久
感照

楊子二
身自取

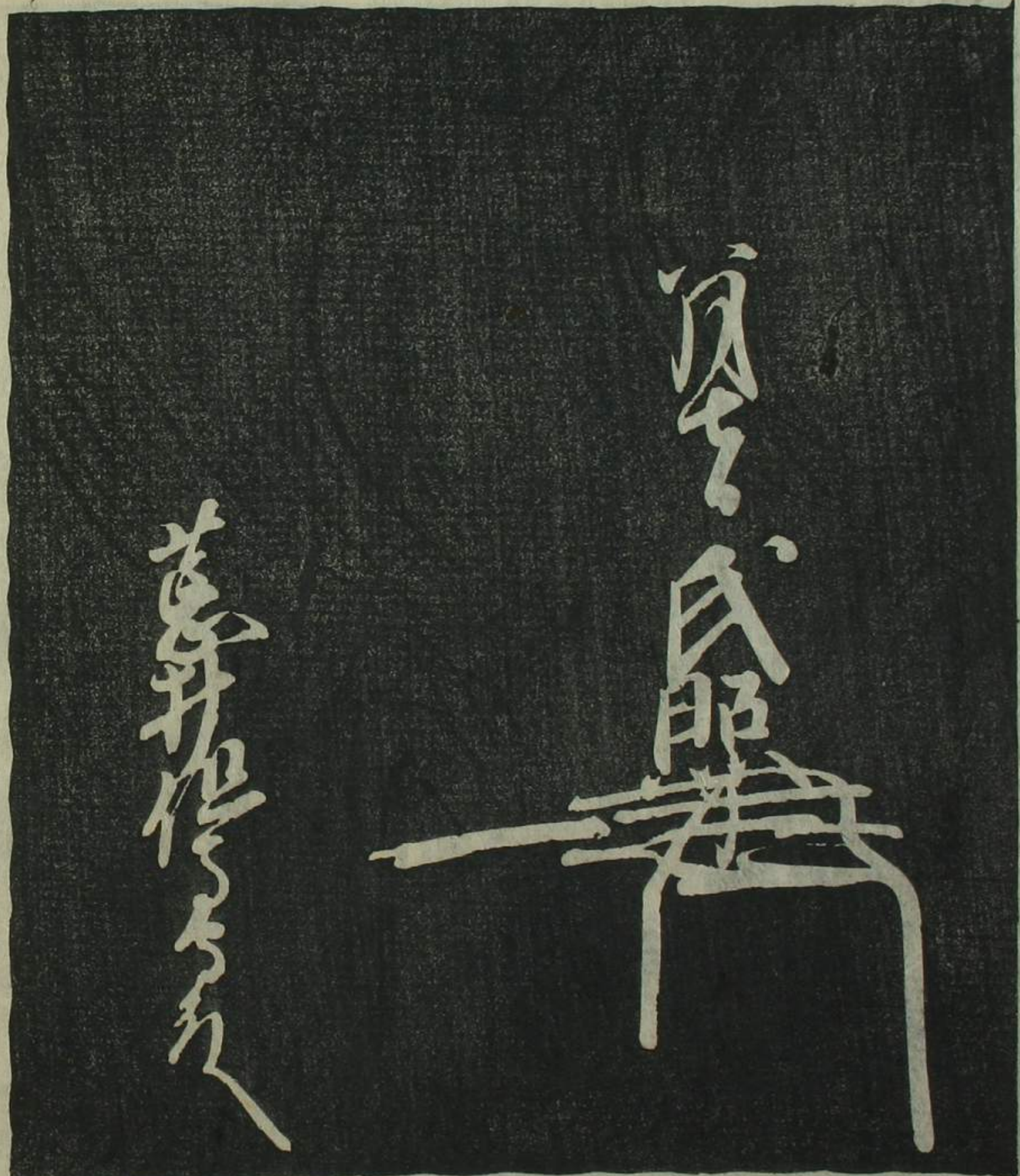
多矣
教中又

持以
定也每

切
走回中感

行
一居一

也



貞吉氏印

葛井修之

布佐 布川より渡場を南へ渡れ、ハ布佐、郷あり倭名鈔相馬郡の

郷名ハ布佐あり總國風土記下總國相馬郡部云布佐郡公穀七

百六十二東三字田 假粟六百九十二丸五毛田 貢牧馬之駿

と見ゆ古語拾遺ハ天富命更求沃壤分阿波齋部率往東國播殖

麻穀好麻所生故謂之總國穀木所生故謂之結城郡古語麻謂之

下總ニと有れば由來あるべき地名ながら未考へ得ずこの地

中葉和田氏の有るて布佐の高臺より手賀沼へ行く方今も

和田前といふ地ありその後田部主水棲きて千葉家不屬せり

常總軍記卷十九云かくて義長岡見家臣栗四方の調畧心の如

くあり一ウバいざや勢を出して千葉を攻めかの輩の軍の援

をも見むとて中畧岡見の手勢三千餘を差加へ都合五千餘騎

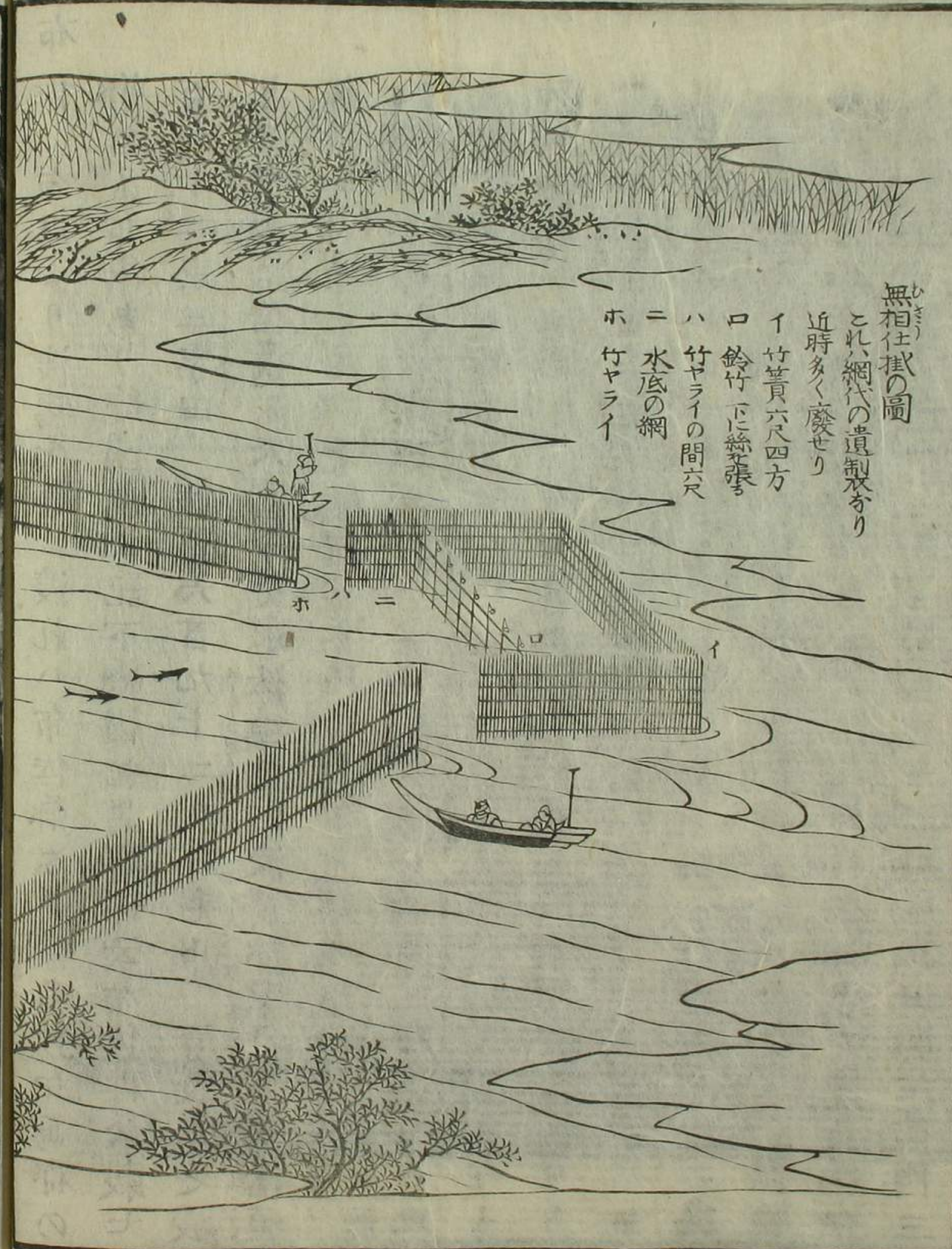
天正十三乙酉年二月三日首途こいでして乃存川へ押來て豊島紀伊

無相住獄の圖

これ、網代の遺制なり
近時多く廢せり
イ 竹筭六尺四方
口 鈴竹下に絲を張
ハ 竹ヤライの間六尺
ニ 水底の網
ホ 竹ヤライ



サケ川をより来り進
て竹ヤライの中に入り鈴
竹の下横に張りたる絲
に觸るれば鈴鳴るこの
時長竿を以て水底の網をあけ出路
を塞ぎ左右の網が追ひてくるを
竹ヤライ竹筭の間あきたる舟を
乗込む處なり



十餘騎来て來り案内して城入る中畧かくて義長二月七日
發向す先存川を發して利根川を渡し布佐を攻懸るその頃布
佐若田部主水ありけるが櫓上にてこれを見る不敵の兵を
の數いくらりと計り難くそも案内の先手ハ誰あるむと見
ゆるふ旗の紋ハ丸ふ五桔梗を紺ふおきて白地あり銀の籠目
の馬印きざくと閃きうらばさてハ存川の頼継が常陸ふ味方
して攻來ると覺えまり豊島ハ案内知透しこれバ油断あり難
し先矢狹間を手配して弓鐵砲をかけよやと走廻りて下知を
爲す然る不桔梗紋の旗と三釘貫紋の旗今荒井氏ふて丸ふ見
二釘貫の紋を用う
えうら櫓より聲かけて當手ふハ存川の御勢をむけられし
と見えたるふ一流紋の替りたるハ誰人ふて御入らと申し
ける時不洗革鎧不星甲を着し葦毛馬ふ白鞍おうせて打乗り
白き麾さきを手不握り鞍蓋不衝立てこれハ常州新治郡小野崎の

新井縫殿介信淑淑ハ治の誤
考ふべしと申す者ふてハあり頼継とハ叔
姪の好ありて遊客する所不頼継折柄居城離れ難く陣代とし
て某正向てハ櫓の上の御歎待近頃以て面白うらず木戸を御
開有て見參ありむこそよき亭主振と申す物ふてハハめと思
ふ儘不欺きうらバ城の木戸を固めし若殿原堪ちへう収て一文
字不木戸を開て突出てけるを新井下知して相懸不懸て散々
不戦ふり未勝負分まへさる不先陣ハ谷田部の岡見主殿が臣
遠藤又右衛門百五十餘騎横鎗不突入て微塵不ふれと戦ふ不
城方固より小勢ふれハ終不突立られ城ふ引入り弓鉄砲をか
けて防ぎける義長遙不見て中畧布佐の押として牛久の家人
村岡半左衛門塙庄右衛門并高崎小莖をくまの旗下都合三百人を殘
りその外ハ武者押して平岡小林笠神以下不ぞ向ひれる
芭蕉翁鹿島紀行云日既不暮う、る程不利根川の畔布佐とい

ふ處不着くこの川不て鮭の網代といふ物巧て武江の市不
齧く者あり宵の程その漁家不入りて息ふ夜の宿醒

この網代ハ水路を妨ぐるを以て是を廢屯今川側不網代場の
名を存せり下ふ六軒新田あり是大森ある宮島氏の有ふり
の宮島より來りこまふ天地渡あり渡守布川不在りこの處布
川の方古深うり一が寛文
十年新利根川の入口を塞ぎノ切を流しより布其處不沙岩
あり未全く化し畢りさるふハあり收とも頗固くして小松鳳
尾竹巻柏石斛石菖蒲等を植うるふ便あり

六軒堀 六軒堀ハ手賀沼の下流不してその傍ある六軒新田よ
り名を得りその利根川不落つる處ハ木下の前あり

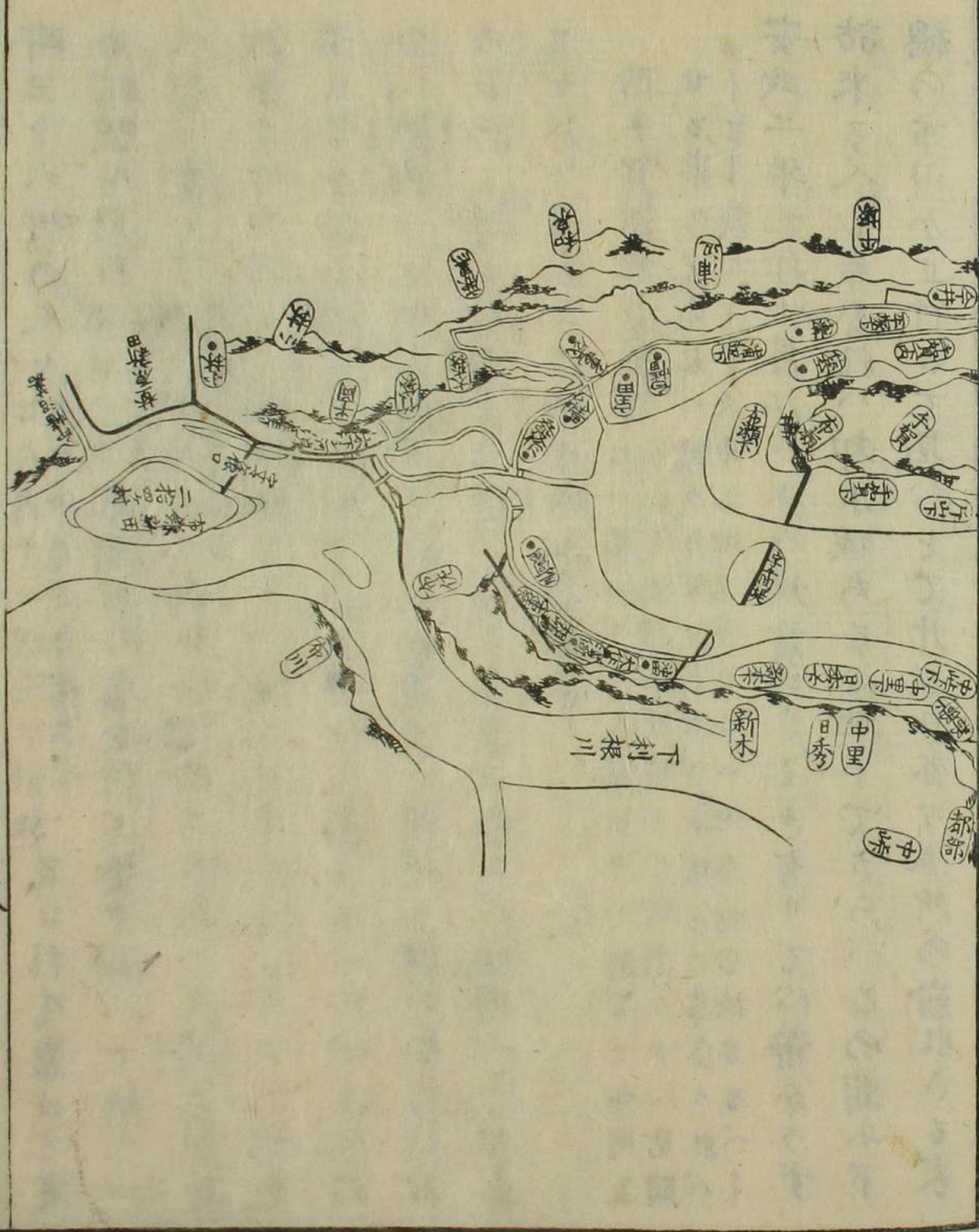
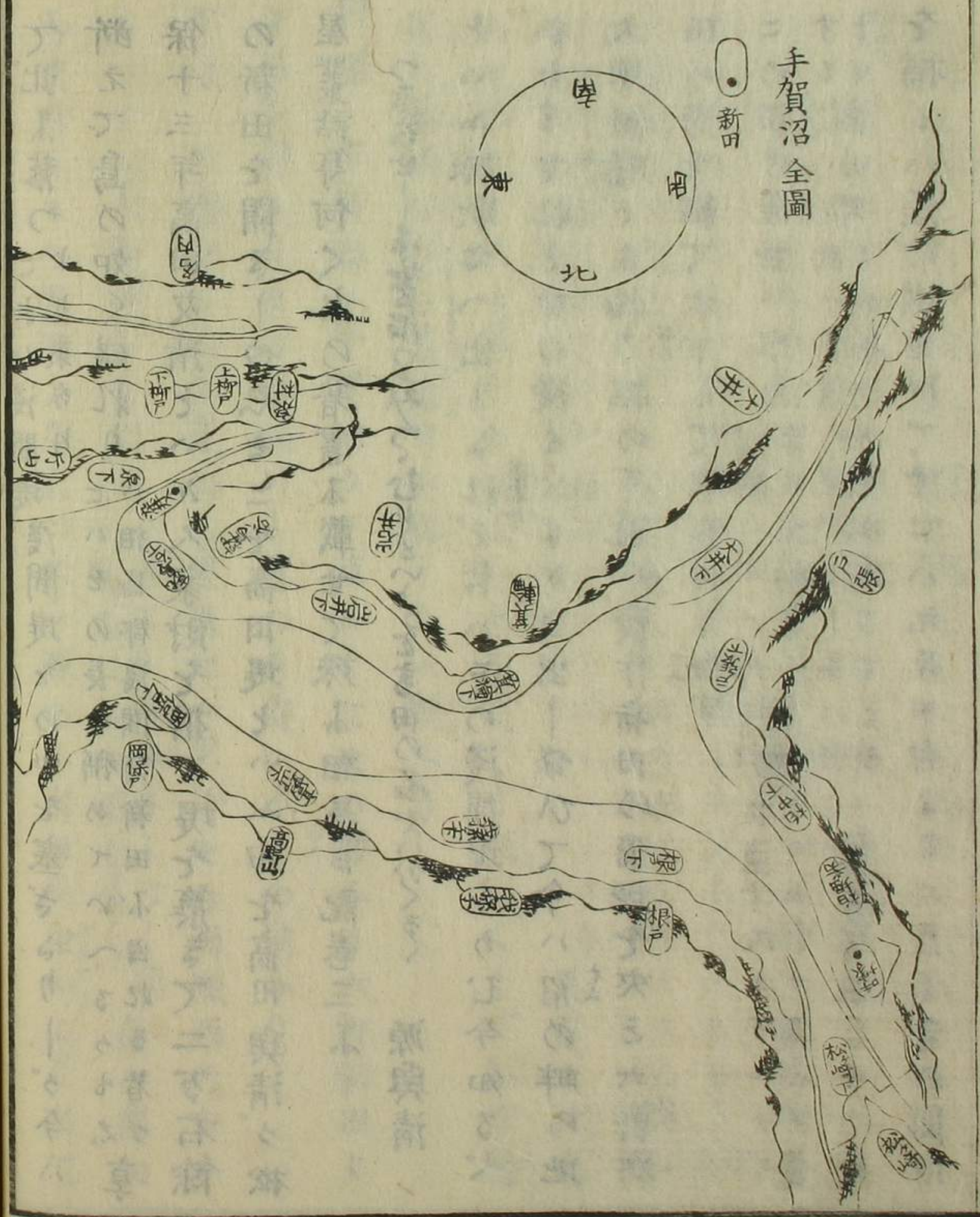
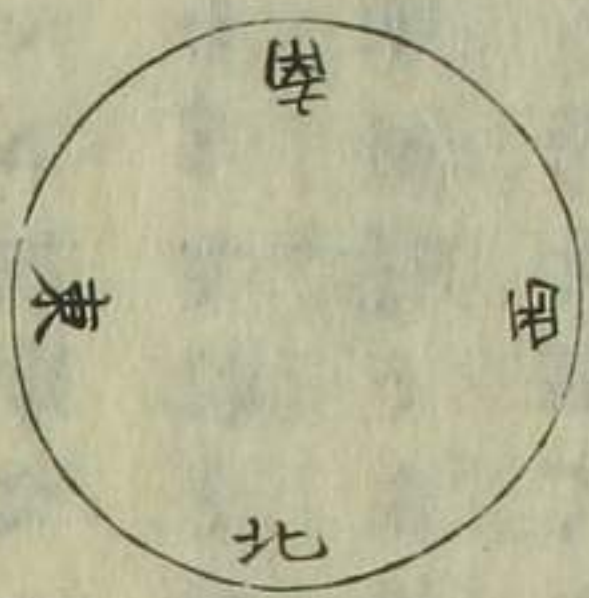
手賀沼 印幡郡不在り東西三里南北一里許その兩源西の方ふ
るハ十六大夫新田より出で小金より我孫子不行く間
呼塚不てその橋を過く南ハ南相
馬栗野ある入道池より出づ又一源あり南相馬金山より出で

て北不落つこれハ淺間堤
より東あり淺間堤その中を塞ぎさりীগ今ハ
断えて島の如く残れりこハその長を稱めていへるうも志
ハ相馬郡淺間前新田不因れる若々享
保十三年高田友清といふ人家財を捐て堤を築きて二万石餘
の新田を開き一也忍そこを高田堤といふ由を高田與清松
屋叢話等何くれの著書不載せて殊不相馬日記卷三不
つきあせし手賀沼つみつむといふを田の名やハかくる 源與清

といふ詠歌さへ出いれど若ハこの淺間堤ありむ今知るべ
からずされどその後と公より力出いひて今ハ沼の畔の地
大率緑疇とされり沼の下流ハ發作新田の飛地を夾之六軒新
田の傍を経て木下不て利根川不合す
この沼の産物ハ水鳥鳥類ナガアチ
等又雁鴨等鰻鱺夜漁す故不ヨムナギ
ハハ江戸不ても賞
とぞ鮎小蝦秋ハ麥園の培
貯ハハツサカ網不てとる蓴菜等ありその鳥
を捕るハ張切網を以てすこハ九月下旬より二月上旬の間沼

手賀沼全圖

●新田



三川南

大

畔三十六村の人々この内十一村を下沼組五日目を當日と定
め晴夜を待ち雨日ハ次布瀬村の告を待て發す網二十段を一
人前の業とす網一段廣十九各その信地あり岸より潭不向い
次第不竹を植て、網を張る不十段これを二重不すこの網を
張る事全岸を闊ぐすを以て鳥皆沼中不集まるこの時布瀬村
の人竊繩を水中不流すこれ不再驚きて沼畔不飛行きて沼周
の衆網不嬰るを潜まり居て捕るありこの二ハ相須づの業あ
るを以て共不その約を爽不事あり

附手賀沼北邊紀行こハ義知グ友人某松戸を過ぎて布川不
せる事のこあれハ精ウリ紀行あり固より經過の中に見聞
しる一載せり文中不地名多うるハ地志好む故あるべし
安政二年乙卯十月江戸不ハ地震のさき有りて心静からず
訪來る人も希かれハ却不暇ある心地一てさらバこの間不下
總の布川かり行きて見むとて廿五日吾ダ本所の崩れたる家

を後不見て深川高橋の東海邊大工町あるサイカチといふ處
より小名木川不舟うけて新川の宇田川柳庵がり行きとり主
いとく喜びて例の鮮魚求め出てつ、盃一ばく巡れりさて主
が誄こて出させる詩

不料今々有君來 萬事匆々且勸盃
定識探勝不可禦 輕舟明且向鴻臺
手と拙うらずぞ有りるそハ大門と字せる舟人呼びて國府
臺より松戸の方不行りむと約一つればかり大門ハ桑川ある
葛西城古迹の大門不居るから不然名づけつ夜あけて例の大
門不船さ、せ妙見島を後不不ハ松戸の方不所る

枯芦はあきゆふをりおひかち河のあある河のこを
か、る歌ハ人の誰う誥ふべきと思ふらへらるれど實ハ此處
の眞景ふれハ後の思出草不載せり國府臺不到る
風ふうハ霜からば夫石の村紅葉

かくて午時頃小松戸小著きぬ舟をハ大、より返一岸小上る
こ、と家崩れて人とうせぬといふ小金小歸る馬雇ひて乗り
りこの邊大率水戸の君の御鷹場あり道の側村紅葉浅く深
く深めていと興あり

何の木とかの木といえずねま式

孩兒拳の葉他のよりと色深く深きなり

於人ともあやむよそののそりもとちのいろは志しずて

寺ありその諸國圭齊録下總國卷小高七十石禪宗葛飾郡小金
原萬満寺といへる者あり高田與清鹿島日記小馬橋といふ里
小慈雲閣万満寺といふ大寺あり靈驗尊き金剛神立とせりふ
といへる處かりゆきくて小金小著きぬ一月寺と崩れりこ
の處ハ諸國圭齊録同卷檀林部小三十五石葛飾郡小金東漸寺
亦不曹洞宗小十石葛飾郡金原慶林寺二十石葛飾郡金原廣徳

寺三十石葛飾郡小金鱗崎村東福寺法華宗小十石金原平賀本
土寺亦ど見えまゝ近き邊ふる栗澤小式内茂呂神社有りとい
へど得行りで止まるとりこの處ハ古千葉家の臣高城越前守の
城邑ありしが後ハ原肥前守胤継の子二郎行朝これ居れ
りその系譜不行朝又号友幸居小弓城大永年中真里谷三
河守武田豊三与行朝數歳争戦真里谷武田迎源義明合戦遂陷
生實城行朝者退入高城氏所守小金城と見えたりその後矢葺
大膳の居處とありしが千葉家小背なる不因りて豊島紀伊守
成田八郎武田左近をして伐さしめたる事常總軍記卷十六小
見ゆかゝる古迹も尋ねまふれど冬の日の短き小心いそ
ぎせられて前の馬夫小數頼之請ひて我孫子不行くべくあり
されバ見ずて止まぬ志バして小金原不入る許多の人の道記
かみ見一に野邊小春ども遊びて最面白き由ふれど寒風吹き

わさる夕暮ふればわが乗りたるより外ふの馬もあらずかの
鹿島日記ふいひたる臙脂鹿毛の神馬ハ今も有りやふと思ひ
續け行く小枯野の景色緑の松ふき不ひてその状いそむ方ふ
いけちあつるる日のでりそひて蒔繪ふ似るねをえくふ
野へ名残なく枯れわされり風小尾花の波うと戦ぐ方ふ有り
松ハところふ合ひてや太く高くして上ふへ緑の枝蓋の如く
さー覆ひたりまむー、て夕日の方ふ遥ふ富士峯を見出でさ
るえさいそずめでさー天際ハ臙脂ふて一文字かきさらむ狀
不平ふる間ふ常の形ふから思ひよりふ小く頭の方狹くて
詩ふも歌ふもいひ盡くすまーかり見る中ふ雪の如見ふされ
ーも灰の如くふりて入日の空も淡墨色ふ爲りぬ風さへ少吹
出でたり

ゆく方ふも路遠く空もふ小金の原の冬は夕ぐま
惜こー日も暮ふルり足も馬の上ふてわが物ふらぬ心地ぞす
る道の傍ふ消石造る處あり鹽も多く出づといふ我孫子ふ著
きぬ小金よりハ三里ふりいかに遅うりーふど宿の人々いふ
我孫子てふ名ハ古聞こえたる處ふりいかに城址やあるふど
問へど得知らず近き頃まで世ふ在りー勘七といへるハ大カ
ふてある時角カ人を馬ふ乗せていそく論トて竹林の竹を折
り挫ぎて積鼻禪と爲ーつ、カ競せむといひーうばいとらわ
びて角カハえとらふふりぬといふ鹿島日記ふこ、ふ來る路
柏といふ里ふ手賀沼を渡るといひこれどわが親歴ーへ呼塚
ふて手賀沼の水源をわとりーふり曉おきて昨日の馬雇ひて
出づ水戸道の岐路あり右ふとりて高野山ふ入るこへ安永ハ
年五月仙臺徹山君の

五月雨のをやまひまとうちくとりさうふええぬ遠の村里 徹山君
と詠めぬへるあさりふりいで異ふる事も無かりやと問へ
ば今年ハ例より青頭苗多く出て梨李桃歸り花多く開き地震
ふりー十日許前より雞埒ふ棲まで梁ふ上りてとふかくふ困
トとりーといふ風景よき處やあると問へば右の方ふる我孫
子新田子權現社へ手賀沼をうちこー遙ふ大井戸張、兩新田の
兩岸の上ふ富士峯を眺めて風景いとむ方無ーといふ日秀新
木を并せて芝原といふ常ハ此處ふて馬をつぎ代ふるあり右
ふ淺間山あり布佐村の有ふりその前ふる新田を淺間前とい
ふその東ふる相島新田の井上氏ハ開墾ふ功ありー家といふ
左利根川邊ふ布川の飛地ふる江藏地新田あり布佐ふ到るそ
の村ふて壺といふ處ふりこれぞ古の跡ふて今の村ハ漁村ふ
りーといふ處々ふ御林ありふを行けば左ふ一里塚有り佐竹

家ふて水戸を領せー時の驛路の準ふてこれより龍崎ふ行き
ーといふこの邊ふ和田前といふ處あり和田氏の城址あり文
政二年の頃そこより石櫛を掘出ー、ふ中ふ長き刀銅佛と石
一片有りきその石ふ忍和田氏墓古傍ふ明應九年卒月日不知
文政二乙卯歲四月建之と鑄りて和田ハ幡と稱ー布佐の正藏
院ふ祭りて有りとぞ猶行けば利根川左ふ見ゆ志バー下り居
て憇ひつゝ、あゝらの物語す我孫子より布佐までハ三里十町
ありことびの地震ふ布佐も布川も家損ねりそハ皆井を掘
るふも地下の柔ふる處ふりとげふ江戸ふても家の甚く壞れ
るハ古川の迹若ハ蘆場を築き固める處とおふーふ不思
へば今年ハ處々ふ彼岸櫻梨等の歸花多く開き栗材早く熟ー
殊ふ九月の晦ふハ鳥鳶中空ふ噪き行きーをさる前表とも知
らで十月二日の災ふ罹りぬる最うれ々ー川の向ふる立崎羽

梅小鹿島
治亂記の
手賀の常
州麻生の
手賀の
てこの
手賀の
あらざる
べー

中等の村にてハヤカバチふといふ蛇と蝮と蝮とさるぐ蠱き
出てこれと寒くて行きと得さりハ九月晦の事と聞え布川
ふて井幹の中不俯して聞けば數鳴りハ十月二日の事とぞ
この道すから手賀沼數見えを以てその周の事とを問ふ
手賀沼の南の村々を名つけて手賀島といふ舊ハ五ヶ村あり
古ハ島ふや有りルん鹿島治亂記不故府中幕下小高麻生手賀
玉造武田小川島名木ふと見えこれバ古き地名ふり此處不御
墓場といふ處あり原越前守墓ふて子孫ハ篠原と稱し江戸不
在り來りて修復を爲すといふ想ふ小金城不居る原二郎
行朝の後ふる尋ぬべー布瀬ハ千葉系譜ふる大介常重の傳
不問 大治 五年庚戌奉寄進相馬郡布瀬郷於伊勢大神宮といへ
る處不して布施ふハ非ず金山落の川の東不江戸より行徳ハ
幡釜谷白井を経て布佐へハ大森木下へハ行く路あり香取日

記不白井より木下の岸へ行く不近き道有りと教ふる人の有
りて龜成といふへ出づ左不手賀沼とて大ふる沼あり潮さら
ぬ海といひつべー細く長き堤をゆきくて木下の川邊不至
るといひ者ありこハ大森の本道をバ經ざる方あり發作新
田過ぎ弘化三年丙午の大水不菰の根の結ほれさるヶ丘の
如く流れ來り人家の庭不入りてそれを除く不いと困トさり
とぞお不問へバ印幡沼ふと有る事ありとを修めて葺田と爲
しおバいかにと思ふかりお不行ルバ布佐の渡場不出づ此處
人家建續きていと賑し彼方不ハ布川の家々際なく立並び
りこの川寒き朝不ハ氷碎けて流れ來るといふ武藏の玉川不
さる趣の説あれど彼處の玉の義ハ然らず此處の氷の玉の如
くおらむ不ハ玉川といひつべくぞお不ゆるかくて布川不渡
り中宿ふる赤お義知かり著きぬ六廿七日の巳時あり主ハ櫛

州甘繩城主あり一赤松次郎則村の後ふて何の時ふ此所ふ流
寓せしやらむその始ハ確からず年ごろ利根川圖志編集の事
不勞きとる人かり主妻竹待付て甚く悦び長女のみことといへ
るそが夫ある印西吉高の惣右門まよ二男宗碩ハ小貝川の西
ある高須不居とるが共ふその邊ふて漁せる魚蝦持來りて饗
す季女のちりといへる今年十二あるが文選素讀一さして來
侍す猶利根川圖志の成功ふ心合せて臼井城圖作りとる大川
書成が予ふて此地ふ養子として來れる杉野周治をも訪ひつ
こ、ら見廻る程ふ家ごとの園まよ庭の中ふ藁ふどふて小社
を作り幣をさし前ふ秦皮ふどの樹を植ゑ注連をはりて有り
氏神社といふ大率九月の内心の儘ふ日を擇びて祭るとふむ
こハかべてこの邊ふする事ふて舊の傳こそ絶えされ庭中の
阿須波神ふて田舎ふハ古風の残りとる最めてこ一又この邊

の寺社ふハ絹ふて三角の袋を縫ひ下ふ括猿折鶴ふど連ねて
懸けて有りこハ女子の縫ひて納むるといふこハ骨董集ふ見
えとる浮世袋あるが江戸ふハ早く絶えとるふ此邊ふ遺れる
といとゆくりされハ旅路ハ物学ふ益ある事少からず又農具
雜器の見る目新しきとあれとさのミハ出さずおむこの邊ハ
古かべて文間と言ひりされバ子飼川落口よりあふとを小
文間といひるふ因りて文間川の名と起れりそハ常總軍記
作れる松好菴紀卓が著せる掃溜集卷三ふ美丸といふ人の説
をあげて下總國ノ中ニフ三々川トイフ名所ハ出テタレ比歌
所ニテモ今ラズ此度此國へ來リテ考へ見レバ今砥臺川トイ
フ川ニ相違ナシノ故ハ文間小文間ノ間ヲ流ル、川ナレバ
文間川ニ違ナシといへりふ考ふべし主の意最切かりされ
ど家の事も思ハるれば下畧

川菜

水苔 倭名鈔

古今集のわがふるもよれまら

春若葉を
生ド長さ
一尺斗り
六七寸水中より
白き花を開く川沿ともあり
む水深き所より取れり



五

大森 この地古千葉家不屬一中頃豊島も屬せるろ布川來見

寺の寄附狀不その名見ゆ今ハ八幡釜谷白井よりの通路不

て稻葉君の陣屋あり此處ハ印幡郡の地あり是より永下河岸へ

雲冷山長樂寺 大森不在り寶泉院と稱す慈覺大師御作の觀世

音あり 縁起云下總國印幡郡大森之郷雲冷山長樂寺本堂之十
當山境内地勢異他先東南谷廣岸高風聲響松樹稍常増行者觀
念西北岡平浦近鳥音和湖水流恒勸道人心大關東下向次序
此所御一覽有之精練功積修行德累勝地思召暫日於此所御修
法有之殊當州國師歸依大尊敬高徳又無雙中畧其御修法間
千手千眼觀世音尊像一軀并持國多聞侍二天以上三體大師
手自刻彫給安置此佛堂中畧于愛中比當所里人森内家吉云人
有之法名曰善阿彌佛堂家富門榮時人褒美日之長者兼信力最
深殊尊敬當山本堂修費大鐘鐘樓再造脇侍二天絲色等建立寄
進其數甚多私云當所古者傳説云當寺是古昔慈覺開基立山
而寺内房中繁榮也衆徒十二房列檐並甍每日勤行以課役勤之
然近代亂妨時節悉皆亡滅所殘唯一二名帳歷然云内記又應安
錄嘉吉二年脇立緑色時節衆徒十二人高二尺三寸五分龍頭その
二年森内家吉が寄進せる小鐘あり四寸徑一尺五分

文左不載す

三川南

廿五

敬白

下慈國埴生西大木林鄉

長樂寺鐘禱事

右志者為天長地久

御願圓滿伽藍女穩

興隆佛法 殊富地主

沐息笑延命

別者信心檀耶永吉

視當二世志地成就

寺中老穩僧靈敏示昌

惣御内兵衛泰平讚

快樂元邊太願也

應安二年十月六日

檀那永吉 白

大工河内推守

鹿黒橋 大森鹿黒の間不あり古き唄入。お不大森よりめん所一鹿カ

くろ黒橋橋おも面志白ろや水之川逆がさ流さ流ふ流か流ま流る此河の水源東

惣甫新田の方より流き出て西手賀沼へ落つ利根川の流とい

水逆行する由ゑさうさ不流るとい云あり

宮嶋勘右衛門といふ者あり先祖ハ安藝の宮島より來り此邊

の地を多く開き一と云り今六軒新田不安藝の宮島より移

祭りといふ弁天んてんの社やちあり

竹袋城山 木下の上不在り今と故井の跡あり井内といふ一家

の古書不この城の事をいへる者あり寫してこ、不出す

表書 當々 城あきあり 水神みづかみの石

竹袋御木下川をた

城者

延長七祀歳佐倉城主

平將門殿常陸筋合戦之
出張城より將門家臣今：
河下之香取郡左原領内
牧野々長者は名者牧
野庄司より其娘小宰相有
そ夫でつづいて重寵依り
ひとまろの城をよせまは
其のち天慶三疎のちるこ
國香か子の貞盛外まこ
そ人ハ藤原秀郷の軍小
らたま首の秀々がとりい
といふ事と是より忽落
城におよびし

今佐原の隣村に昔平野村に御宿あり
家あり破れし昔平野村に御宿あり
宿をいたしおやど家よびて名を云
人の牧野のちの家の將門の名を云
ふの稀ありおの家の將門の名を云
七ケ所あり氏神の家は此を祭る
こいふおれ牧野庄司の家は此を祭る
其の娘を將門御重寵ふて世に城へ
召よせ置る有るまど西大須賀
桔梗の井寺の付物あるは西大須賀
村東三井寺の付物あるは西大須賀
同懐銀ふど納め物あるは西大須賀
猶考ふべし

將門が首 庚子二月こつたよ
延長初り返る相馬郡

城のいかさま九方より直
格五六丁横志二町より三町を
へ井戸の志ろの東の方有る
志大河谷系廻りて浦後
谷と山つき暮雨の控の神
おほりまめさうづえ
其城山中段千葉の侍従なる
と云人常為筋河幾いた
何たひといふをみよりの
り其左なるすむらか水
神石をたで

權神といふ處ハ井内の上在り石
神を祭り有りそこより石櫛を掘り
出せる事あり

圖畧之

右水神下より河をさ

す其財の糸あぎ登りき

地を以て為さるへ糸あぎ

登りき所毎年貢納す以下畧之

水神社

竹袋城山東方半腹不在り古ハ亦不下不在りといふ
元徳四年の板碑あり千葉家の臣佐藤氏建つる所といふ



木下河岸

竹袋村の内あり常總軍記卷廿云今木下といふ名高

き所下利根川の岸あり是ハ竹袋より利根木を下すの名

かり然る小木下といへバ江戸も隠かく竹袋といふハ知る人

無一云古この地纔十軒をかりあり一が寛文のころ此處小

旅客の行舟世木下茶を設けたる小因りて甚く繁榮の地と

爲れりその鹿島香取息栖の三社小詣一及び鉾子浦小遊覧す

る人多うればかり問屋七郎左工門六の番船を預り旅人の煩

勞をこたむ

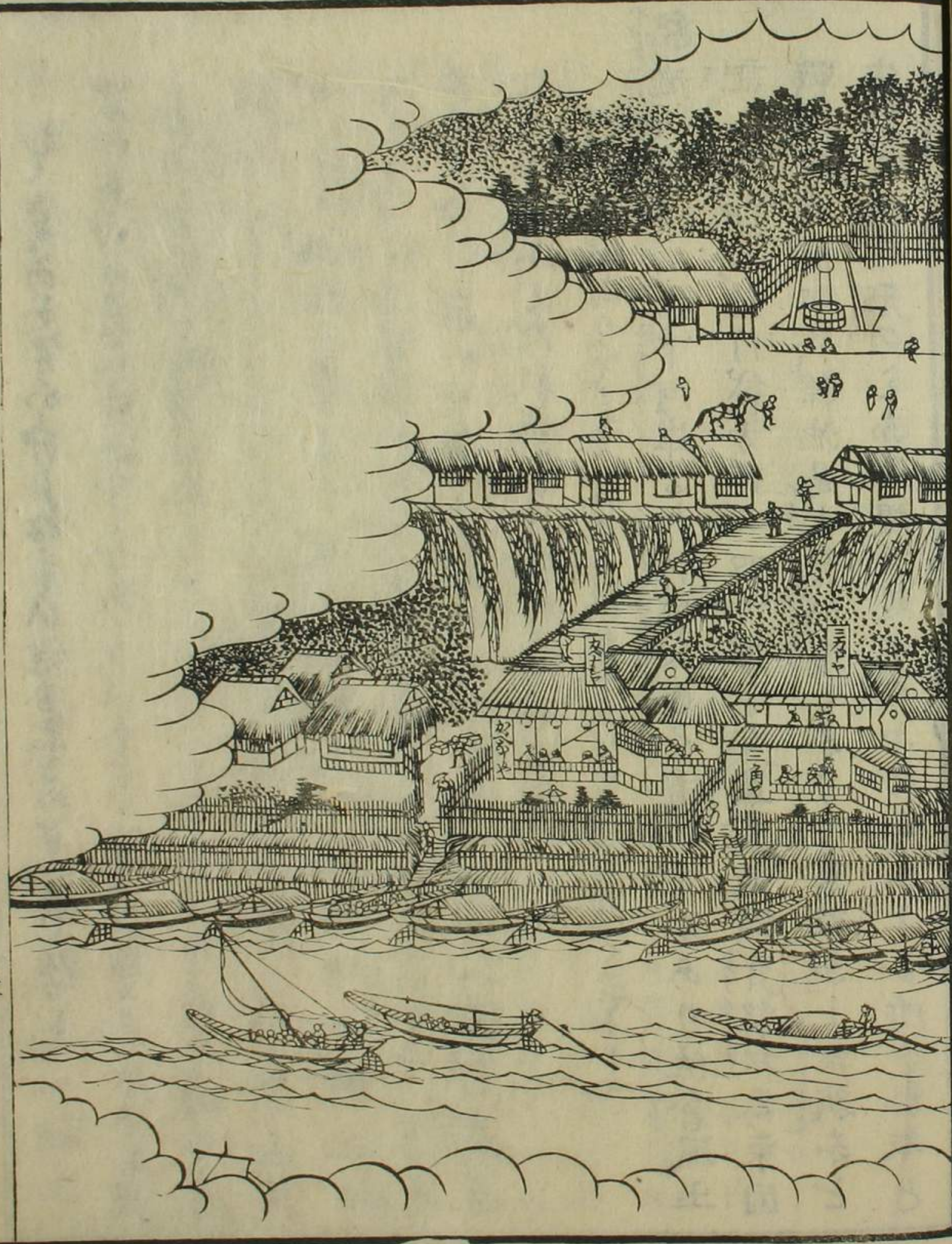
安永八年五月仙臺山君の鹿島道記云前畧今日も日高く木お

ろし小つぎぬ十百木おろしを出て今日ハひめも舟路由く道

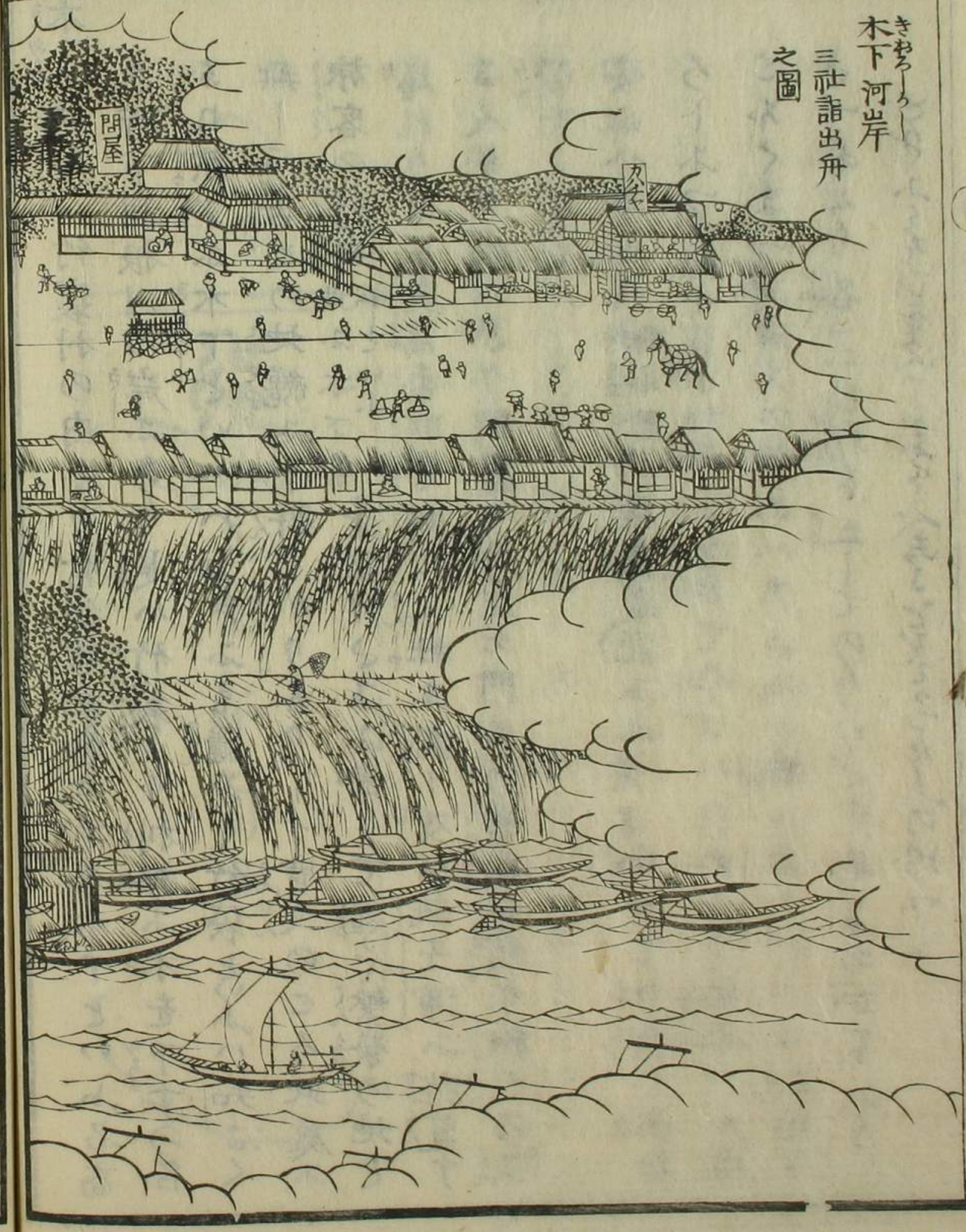
こなくまづ河岸木のぞめバおとみの旅小まうけたる船あま

とつかがり各二三の列を正してのりいごをみるめがちぬり

とみふをひきよめておとみとぞとらるる川の川つ



木下河岸
三社詣出舟
之圖



むらさきのとりのかげし移まひ誰も見るあやうきはつ

里のあげやまきハつあづもあはれをさ里の翁までこのふれ
よそひえむとてきたれりこの刻むりより一宇時て昨日の名
跡あくをうごまてえりてなごめあつたあのみあた
りみて細ひくして目の茶ふ鯉鮒あど漁を中ふ鯉ハ二さ
くふあやうもあのみ川みてとるとはふあきみののとしていさり
まら翁の翁ハぐわしていふとづーゆけを芦の着るまき
たるが風ふまだれあひくるまきーく見ん

川風ふ波おろくまこれあはれ翁あもむをばはあひくまきーし

貉池 并貉坂 木下河岸より竹袋へゆく道の左ふあり佐倉風土

記ふ在印西莊竹袋方百三四十歩中有葦菜池頭有貉坂焉東国
戦記所謂狸坂及狸池是也今ハ浅くふりて葦菜かー芦菰かど
生茂り池の形のこふり堤を越て向ふの山ふ上る所を貉坂と

いふ是より竹袋本村かり

稻荷山神宮寺 竹袋ふ在り三寶院と稱す古ハ龍腹寺ふ屬せー

とあむ嘗て一家ふて當村三寶院開基記といへるを見り下

總國殖生西曰井領印西莊竹袋郷稻荷山神宮寺三寶院者應仁

元 丁亥 太 按ふ太歳ハ木星ふて譬へハ太歳在 二月日開基祐

善坊慈眼庵ヲ取立云と有り此の緑故と轉徙の事をと精く

載せしれどそハ寺ふも舊記の絶えたる不因りて吾が本尊如

家ふのミ甚く秘する事とて寫す事ハえ許さざりき

意輪觀世音 御長五の腹藏ふ在り一最勝王經等を見一に皆蠅
頭細書ありきそが中ふ佛說宇賀神將經の末ふ

本願聖竹袋神宮寺祐善社
下總國殖生西 龜濕 藤内小倉村
應仁元年亥十 二日始造本尊記

地藏堂 別所ふ在り金龍山寶泉院地藏寺といふ原或部少輔の

祈願所ありと云二王門の裏古の二王像あり朽損トていと
 珍一又客殿の後の庭小兼安四年の板碑あり去の村小月岡源
 古衛門といふ舊家あり水海道の側板橋といふ處の城主あり
 一月岡播磨守が後ふて系譜古文書等多く持りまよめづら
 矢筒を藏せ其図左ふ



筒ハ竹を薄くけつり紙をまゝりて黒ぬりふまゝると見ゆ
 もやうハ殊に青貝あり

矢筒惣長三尺七寸 筒口名三寸五分斗り

敬白

奉懸鑄下慈國瀧水寺推鐘一口辛
 右志者奉為 天長地久御願圓滿
 乃至法界平等利益也仍如件

達武五年八月廿日

所存

石神社別所地藏堂より西十丁むくり山の半ふくふあり陽石の形不して高二尺四五寸建仁□□□と名まゝり同村岩井彦右工門の氏神ありといふ

雲林山瀧水寺 瀧村ふあり本尊藥師如來仁明天皇の御願所兼和年中の建立門の二王運慶作といふ国司藤原朝臣平狀を藏を年号不詳又美應三年相馬小次郎平貞胤の寄附狀明暦四年同昌胤の寄附狀等ありまゝ古鐘あり建武五戊寅八月八日と

鳴澤 同村西の方ふあり佐倉風土記ふ云傳水脉潛通村中此水盈則村井皆盈此水縮則村井皆縮矣

天龍山龍腹寺 龍腹寺村ふあり本尊藥師如來を安置を側ふ地藏堂あり大同年中飛驒工匠建るといふ門の二王老ハ慈覺大師右ハ丹慶の作といふ此寺舊龍福寺と名く釋名上人雨を祈り

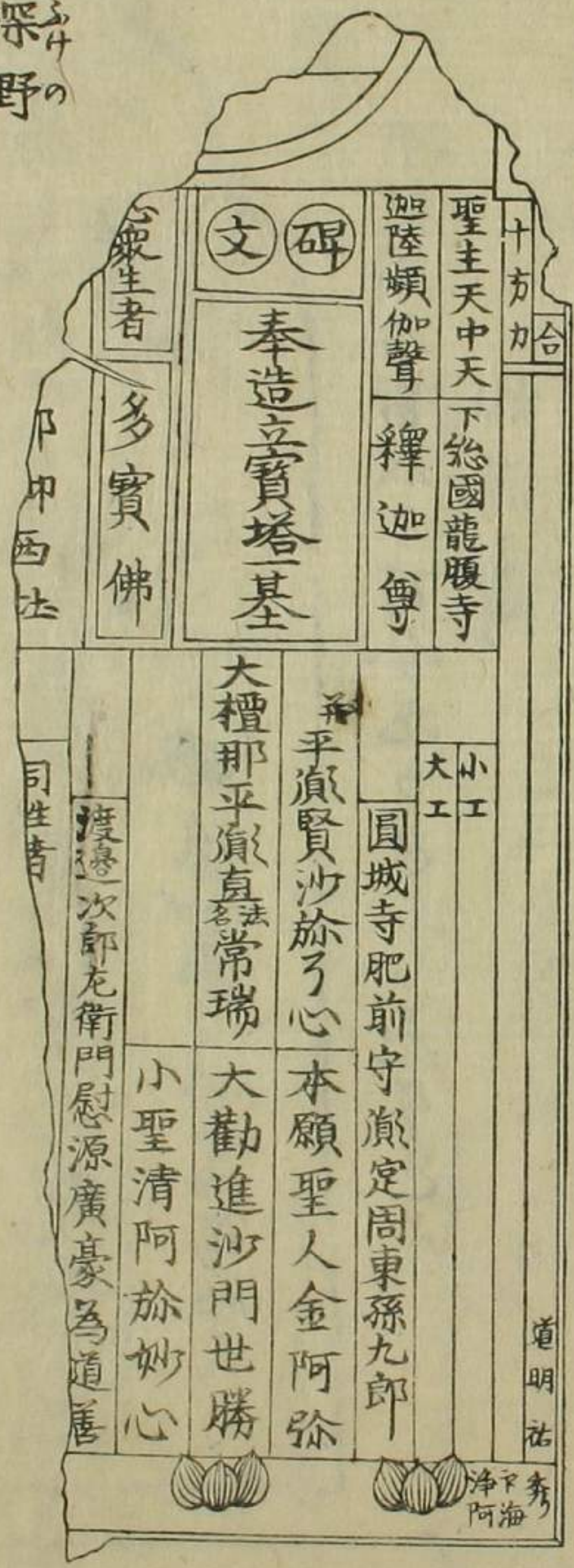
一時龍死して腹を墜との地ゆゑふ亦龍腹ふ改とりとぞむゝ志ハ七堂伽藍ふして村中ふ二十五坊を置けり遠近七十五箇寺の本寺ふて大寺ありと云り其後兵火の爲ふ灰燼とあり一夏東国戦記ふ見ゆ去文政元年七月又々火災ふ罹り一時銅の寶塔棟札一版を得たり則ち領主稻葉君より新ふ函を下し是を藏む其函ふ記して曰

下總國印幡郡龍腹寺寶塔棟札一版以銅作之長一尺八寸幅八寸表背鐫字上頭左邊破缺不全背面細字漫漶不可辨嘉吉二年壬戌等字猶可讀其詳不可考據天和元年僧智祐所撰勝光寺畧緣起龍腹寺舊號慈雲山延命院大同二年九月曰僧空海之奏詔其徒慈觀建七堂伽藍於下總國印幡郡 賜號曰慈雲山勝光寺延命院自後世爲 勅願所延喜十七年大旱奉 詔祈雨驗有龍之異因改 賜號曰天龍山龍腹寺嘉吉二年國司千葉氏脩其

堂宇建五重塔永正五年二月塔無故倒時主僧覺道勸千葉氏伐北條氏而自聚兵於寺將以援之北條氏聞之八月遣潛兵夜襲擊燒滅之覺道死寺廢者五十餘年至天文十九年千葉氏復建諸堂以再興焉而比舊不及十之一云後二百五十餘年文政元年七月寺僧不戒火諸堂盡災於灰燼中得斯棟扎龍腹寺村以吾藩移封之後猶錄于別邑大森治郡奉行臣八太高之代官臣春名復等慨古蹟之湮沒喻主僧取棟扎以進覽公歎其漫漶不可續而悅舊物幸存一覽之餘乃新其函以還且使高之命主僧慎藏勿喪使臣楸記其事於函臣楸謹案棟扎蓋塔之上梁文也嘉吉二年壬戌距今年丙申三百九十五季平胤直高見王之裔千葉胤常胤八世之孫滿胤之子為兄兼胤嗣無道臣屬多叛東氏圓城寺氏千木氏木村氏等爭權相分為二構兵康正元年八月十五日自殺于玉橋阿彌陀堂胤賢及圓城寺氏渡邊氏周東氏即其同族或臣屬也厚二分

天保七年歲在丙申十二月丁卯 儒官臣本多楸謹記

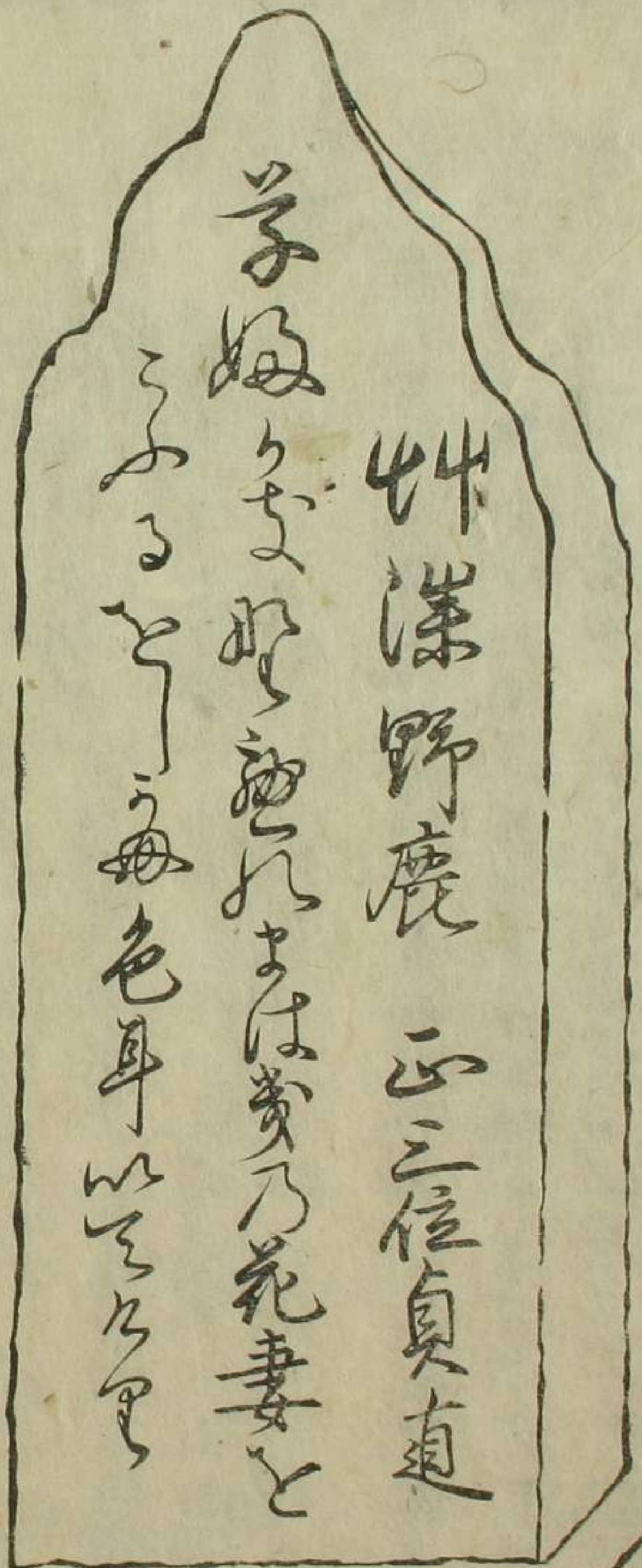
草深野



在印西莊見于東國戰記此原也東西六七里南北五六里六町環野村凡十餘鑪田也船尾也結緣寺也松崎也吉田也岩戸也大迫也角田也造谷也荒野也俱在草深野南起於坤終於震馬和泉也鹿黑也大森也別所也小林也龍也龍腹寺也皆在草深野北起於乾終于良馬西僅通手倉野者總稱之ス富小路正三位或部卿藤原貞直卿有詠歌尤小

富小路如泥齋藤原貞直卿

草深丸山觀世音境内之碑



下総國の香取の百合丸うとふら花をまこと

如泥齋

百合丸ゆりてころれいぢ登れ葉のまれ乃香取の名をけきん

けきんふとひ出く清き雲いそぎらるるたわくるは歌とささげり
らるるけふと残ぬてよりこひのあやうけいそぎとをれそ
和しきとととと

草笑香取百合丸

雲の上たのほさよりして賢名も四つふたはくやまひえこころむ
をい子明と今年文極文月の始都より

如流の君はみまらふよりとねくね記なりなるまこととみふなうら
こころめりね笑といふ野とさへ下り流りぬ母屋の長押ふ
かこへき扁額ふせりて賜やとるまとの所ふ何よりて
いけふきと物ころれきこて

俳諧歌場紀貞顔

花知ふよまは流まはよ深き百合丸形ひ乃玉のつゆ

二世

草深野鹿

翻園香取花笑

咲萩乃色平いそけし書とさる草深野鹿はを鹿け聲

印西合戦

常總軍記卷二十云かくて義長見家臣栗兵を屯

めて竹袋ふか、つて平岡へ出屯でふ小林といふる小林十郎

左衛門が籠り一砦を責うごうに天正十三年二月七日先陳府川の豊島

が陳代荒井縫殿助豊島が老臣根本勘助銀の小田原笠の馬志

る一を真先ふ立て関を造りかけてせめ動うす小林ちつとも

さ日がむして敵をちうくと引付て弓鉄炮を一同ふをふう

け々まば真先の兵三十餘人矢庭に射倒されて人を拵取て

さ、み得ず小林是を見て時分ハよきぞや突くづせと自らら

白糸の鎧不同ト毛の甲を差一鴉毛の馬ふ梨子地の鞍あうせ

打のり十文字の鎧をひねつて我ふおとらぬ若者八十餘騎前

後无右ふ立からべ天地もくづる、斗りごつと叫て突出る

ふさしもの先手つき立らき人あざれをついてくづきたる新

井縫殿さいを打ふり蓬一人々城兵はとづりの小勢あるぞ取

あめて一人も残さず討とるべいと志きりふ下知をふりたき

共引立一兵のくせと一返一もせむと二の備ハ矢

田部の老臣遠藤又右衛門百五十餘人替つて突うへに小林是

を見て敵ハあら手あるぞ附入ふせらる、ふと兵をまとめて

城ふ入るその進退のまをやりあるまおのまが手足をつうふ

が如く小林下知して弓鉄炮を兩あられふとく打うけ

うバ遠藤も返きて、其日の軍ハ果ふり明きバ二月八日義

長下知して三の手四の手ハ笠神松虫ふせめう、る笠神岩井

庄太夫是を聞て城より三丁斗り張出して待りけり三手の

大將ハ蝦原次郎三百餘騎相が、りふか、つて関をあげ弓鉄

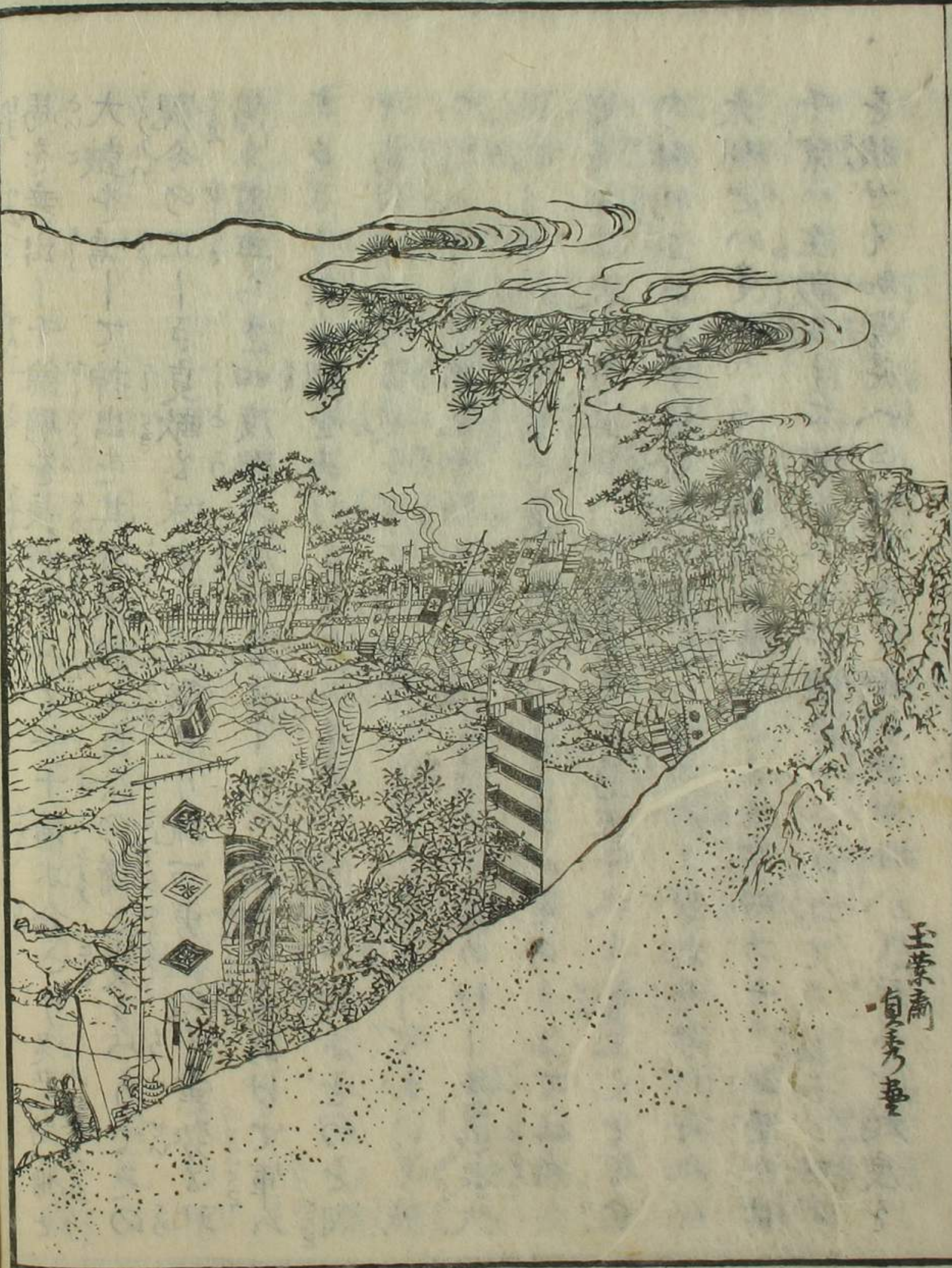
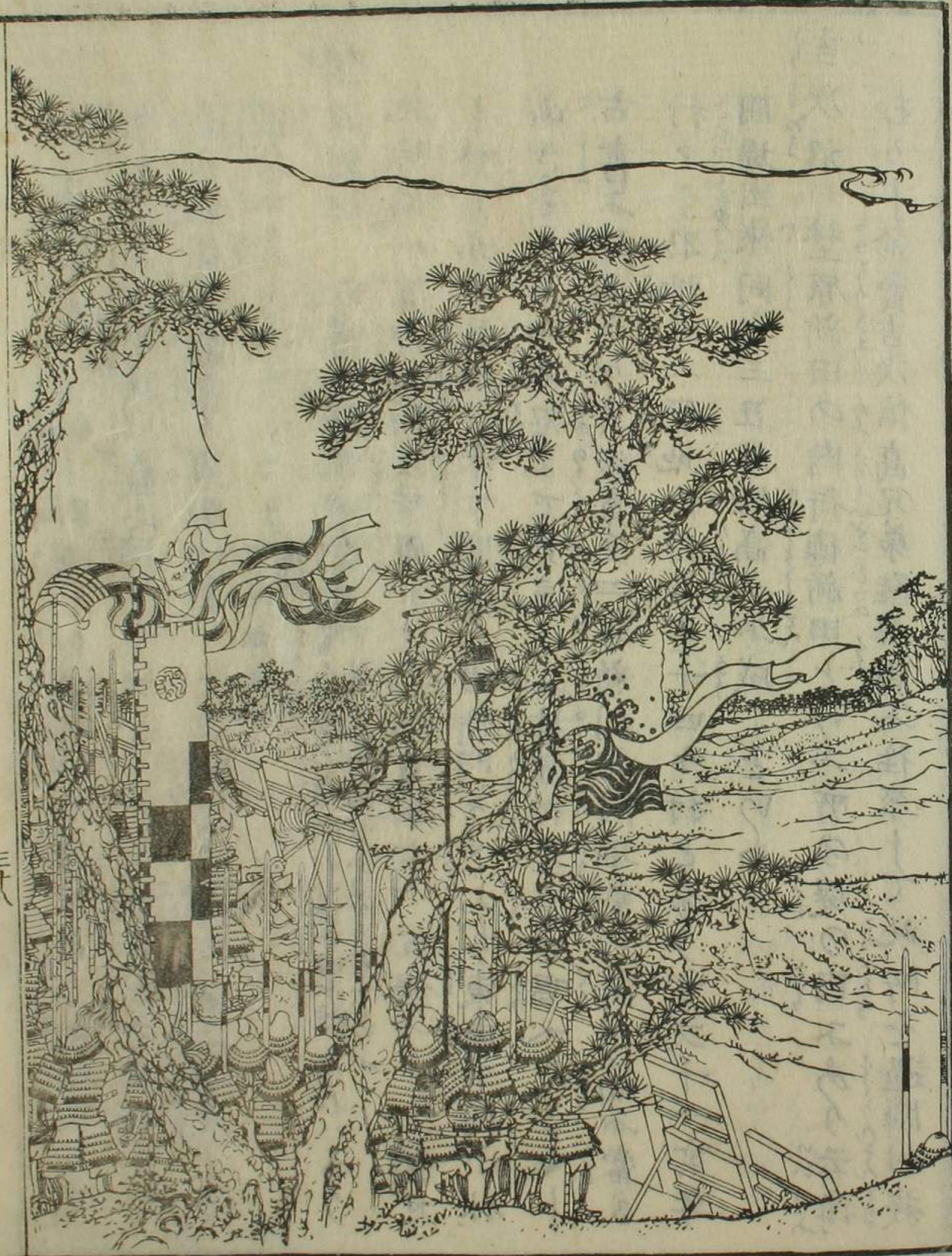
炮をそ仕うけりる笠神二百餘兵隠ふ関て待りけり蝦原次

郎下知しるハ手勢百五十騎ハ笠神り備の正面を責べし残

る百五十騎ハ横鎧を入べし敵ふ増りし勢を持て後陳へ軍を

譲らば何の面目有べき突破きもの共と真先馬を進て
乗出き其手の軍兵何うハ以て猶豫べき眼をいらけて突懸る
笠神勢この勢へき急き一裏くづれして乱一うハ蝦原が勢
大いさんで微莖ふかれと戦ふより斯る処へ松虫民部三百
餘騎黒煙を立せ來て笠神を助け火出る斗ふ戦ふより蝦原
が勢心ハ危とけふもや共戦ひはうき一兵ふれハあら手の
民部ふ突立らきむつれとくづれて引退く四備あり一櫻井舎人
佐野早人三百餘入替て突りへも双方名ある勇士ふして名を
を一命をく一まふ今日を限りと戦ひたり印西勢五百餘騎
岡見勢六百餘兵入ちがひくく千騎が一騎ふあるとて一足
も引べうら次と西ふむらめき東ふふびき巳の刻より未の下
刻ふ及べども勝負ハさらふつらざりなる天晴千葉と岡見の
地あらそひらふを限りと見へたりなる義長遙ふ是を見て自

馬を乗出一千餘騎を長蛇ふ立て二十備ふ分より是五十騎一備と
大鼓を鳴して神出き其有様誠ふ自余の備と更りたりてその
號令の正一き更敵も味方も感徹せり流石勇猛の千葉勢と此
備ふ蒸立らき四度路ふ成て見え一うハ義長大音あげて軍ハ
志をま一たり関をあげよと下知をまハ惣勢一同ふとづと関
ぞあげたりなる是を聞て印西勢いよく心散乱しておのく城
へ引入りたり岡見勢猶も續て城を責んと返りけ一を義長大
ふ制して此邊の砦を責るハ全く勇を志めまのこふて雌雄を
変るふ及ハ次其故ハ千葉方の小砦五十八十責ぬくと全
の勝利ふあらす佐倉城を責落し香取郡千葉郡を平げんハ
大利とハまべうら次他國ふ責入さる合戦味方七千ふは次
千葉ハ主戦ふして軍兵二万を過より一人ふても益なく味方
を損せを加勢さへき味方なく敵の重地ふ入て死んど越度を



玉葉齋
貞秀畫

とる夏あるべし誠の勝利ハ佐倉香取千葉不あり無用也とて
勢をまとひ松虫の墓不陳して大りゞ里を焼夜打の用心して
夜を明きは義長軍旅の加こき所あり斯て義長休足して
軍の工夫をあらうなり以下松虫の

桝原新田

印幡沼の北畔あり里人十四ヶ新田といふ十四ヶ村あればあり
下畧して十四ヶとをうりもいふ

此地始ハ笠神村御立桝原ととあへ貢米七十五俵づゝ上納せ

一桝原あり其頃ハ木下問屋仁右衛門下より東南平岡小林

山ささより印幡沼まで見通し不皆笠神桝原と唱へたるよ

古書不見えこり其後寛文二年新利根川堀割の節川筋不當

村々々此所へ替地仰付らき十四ヶ村とあり寛文十一亥年

田堤出来同十三丑年御高入不成一といふ

吉次沼

桝原新田の内行徳新田といふ所の堤の内不あり云傳

むり一金賣吉次信高兄弟陸奥國不往來して此所を過隣村萩

原村不荒神左近といふ強盗あり吉次兄弟を殺して貨を棄ふ
土人墳を作り樹を植て跡を去る次是を吉次の墓といふ寶永
元年の洪水不此所の堤切き墓堀まぐぼれて押流さる其跡方
二百歩むかりの沼とある今是を吉次沼といふ此沼の深さ知る又
隣村中根村戸崎といへる所不觀音堂あり十一面觀世音あり
是金賣吉次の守本尊ありといふ靈驗あらたあり

